

西屋敷遺跡 2

N I S H I Y A S H I K I S I T E 2

農地整備事業（円田2期地区）に伴う緊急発掘調査

2018

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

西屋敷遺跡 2

N I S H I Y A S H I K I S I T E 2

農地整備事業（円田2期地区）に伴う緊急発掘調査

2018

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

序 文

蔵王連峰に抱かれた蔵王町は、蔵王火山のもたらす火山災害の脅威と向き合ってきた地域です。歴史上の記録を紐解いても、「吾妻鏡」に記された1230年の噴火を最古に少なくとも15回の活動が記録され、火山泥流や降下火山灰などによる被害を伝えています。また、土壌の不安定な火山地帯から大量の土砂が押し流され、山麓の松川流域に幾度も台風や豪雨に伴う洪水被害をもたらしてきました。

一方で、山麓の丘陵地帯はなだらかな地形と豊富な湧水に恵まれ、古くから人びとの生活の舞台となってきました。実り多い落葉広葉樹林の森を背景にして、水辺を望む高台には幾つもの縄文ムラが営まれていたことが分かっています。また、円田盆地や松川流域の低地には肥沃な耕土が広がり、遅くとも弥生時代の中頃には米づくりを行なう人びとのムラが営まれていたようです。

かつて縄文人の活動の舞台だった丘陵地帯は現在、水はけの良さや火山灰質の土壌を活かした梨や桃などの果樹園として利用され、県内有数の果樹生産地となっています。また、弥生時代から稲作が行なわれてきた円田盆地や松川流域の平野には、現在も豊かな田園地帯が広がっています。

このような環境下で円田盆地の大規模な場整備事業が展開され、その工事に伴い南部の円田1期地区では昭和63年度から平成2年度にかけて、北部の円田2期地区では平成15年度から継続的に遺跡の発掘調査が実施されてきました。事業の実施に先立って計画区域に分布する多数の遺跡の保存について関係機関で協議を重ねた結果、盛土によって地下の遺構を保護することが基本方針として決定され、やむを得ず工事による破壊を免れない範囲については、事前に発掘調査を行なって文化財保護法に基づく「記録保存」の措置を講じてきました。

本書で報告するのは、円田2期地区の集落道路2号線拡幅工事に伴って平成28年度に実施した西屋敷遺跡の発掘調査の成果です。調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡などが発見され、当時の集落が営まれていたことが判明しました。

豊かな自然環境や歴史文化、産業が融和した郷土に対する理解を深める営みは、町民が郷土愛を育む源流です。本書にまとめられた成果が広く活用され、地域の歴史解明や郷土教育の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にあたりご理解とご協力を賜りました宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、小村崎区、近隣住民の皆様より感謝を申し上げます。

平成30年1月

蔵王町教育委員会
教育長 文谷 政義

例 言

1. 本書は、蔵王町大字小村崎字西屋敷ほか地内に所在する西屋敷遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、農地整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う集落道路2号線拡幅工事の事前調査として実施したものであり、発掘調査と整理作業及び本書の作成に係る業務は、調査原因となった事業の主体者である宮城県大河原地方振興事務所を委託者、蔵王町を受託者とする業務委託契約を締結し、蔵王町が平成28年度に発掘調査、平成29年度に整理作業・報告書作成作業を実施した。
3. 本発掘調査とその整理・報告書作成作業は、蔵王町教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財保護係が担当した。平成28・29年度の職員体制は下記のとおりである。

（平成28年度）

教育長 佐藤 茂廣 生涯学習課長 我妻 清志 課長補佐 日下 朝男

主幹兼文化財保護係長 佐藤 洋一 主査 鈴木 雅

文化財専門職臨時職員 庄子 善昭 我妻 なおみ 鈴木 和美 江尻 祥子

文化財作業員 我妻 英子 岩佐 若奈 大沼 恭子 加藤 幸子 菅野 慶一 佐藤 かおる

佐藤 貴美子 松崎 祐二 松田 律子 渡部 真理

（平成29年度）

教育長 文谷 政義 生涯学習課長 我妻 清志 課長補佐 北沢 夕子 佐藤 洋一

文化財保護係長 鈴木 雅

文化財専門職臨時職員 庄子 善昭 我妻 英子 我妻 なおみ 鈴木 和美 江尻 祥子

文化財作業員 大沼 恭子 菅野 慶一 佐藤 かおる 佐藤 貴美子 辰口 創野 松崎 祐二

松田 律子 渡部 真理

4. 本発掘調査の整理作業にかかる遺構図のデジタルトレースは我妻なおみ、遺物実測・デジタルトレース・写真撮影は庄子善昭が担当した。
5. 本書の執筆・編集は鈴木雅が担当した。
6. 本発掘調査の写真・図面等の記録資料と出土遺物は、蔵王町教育委員会が一括して保管している。

調査要項

遺 跡 名：西屋敷遺跡（宮城県遺跡登録番号：05196 遺跡記号：UL）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷ほか地内

調査面積：420㎡

調査期間：平成28年10月24日～12月22日

調査原因：農地整備事業（円田2期地区）集落道路2号線拡幅工事

調査主体：蔵王町教育委員会 教育長 佐藤 茂廣

調査担当：蔵王町教育委員会 生涯学習課 文化財保護係




調査主任：鈴木 雅

調 査 員：庄子善昭・我妻なおみ・江尻祥子

調査協力：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区・蔵王町小村崎区

奥平穰士・鈴木良宏・小村崎区長 村上敏幸

凡 例

1. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図、遺構配置図・遺構平面図等の方位は座標北を示している。
2. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図等は下記の図幅を使用して作成した。
 - (第3図)「蔵王町の地形区分と遺跡の分布」：5万分の1 都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」(宮城県、昭和58年調査)
 - (第5図)「遺跡周辺の地形」：5万分の1 地形図「白石」(明治40年測量・明治43年発行)
 - (第8図)「円田盆地周辺の遺跡」：電子地形図25000(国土地理院、自由図郭版・平成24年図式・平成28年6月13日調製)
 - (第10図)「工事計画図」：円田2期地区(担い手)集落道路2号線 計画平面図 1:500(宮城県大河原地方振興事務所提供)
 - (第11図)「調査区配置図」：蔵王町管内図 1:2,500(蔵王町、平成元年測量)
 - (第12図)「調査区設定図」：円田2期地区(担い手)集落道路2号線 用地実測図 1:250(宮城県大河原地方振興事務所提供)
3. 土色の記述は、「新版 標準土色帖(2005年版)」(小山・竹原1967)を参照した。
4. 遺構・遺物実測図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
5. 遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
6. 遺構略号は、下記のとおりである。
 - S I：竪穴住居跡、S K：土坑、S D：溝跡、P：柱穴、K：土坑(住居内)
7. 遺構・遺物実測図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
8. 遺構・遺物図では、下記の表現方法(CMYK値・パターン)を使用して記載した。
 - (遺構) 床面硬化範囲 ：灰色(K:10%)の塗り
 - 攪乱範囲 ：斜線パターン表示(断面図)
 - (遺物) 黒色処理 ：灰色(K:10%)の塗り
9. 土層注記表では、下記の略号を使用して記載した。
 - (住堆)：住居内堆積土，(住掘)：住居掘方埋土，(壁崩) 壁際崩落土
 - (柱痕)：柱痕跡，(柱抜)：柱材抜き取り穴埋土，(柱掘) 柱穴掘方埋土
 - (堆)：堆積土，(崩)：崩落土，(人為)：人為的埋土(特記ないときは自然堆積土)
10. 遺物観察表では、下記の表記方法を使用して記載した。
 - 製作工程：調整・加工痕跡AよりBが新しい：「A→B」、新旧不明：「A・B」
 - 計測値：残存値および口径・底径が復元値である場合は数値に()を付した。
11. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して掲載した。なお、蔵王町文化財調査報告書については巻末に目録を掲載し、本文中の引用箇所では「町20集」のように省略して記載した。

目次

序文

例言

調査要項

凡例

目次

第1章 遺跡の環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第2章 調査の経緯	12
第1節 調査に至る経過	12
第2節 調査の方法と経過	13
第3節 整理の方法と経過	16
第3章 調査の成果	18
第1節 微地形と基本層序	18
第2節 遺構と遺物の概要	18
第3節 検出遺構と出土遺物	21
第4節 遺構と遺物の特徴	36
第4章 総括	38

引用・参考文献

蔵王町文化財調査報告書目録

報告書抄録

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

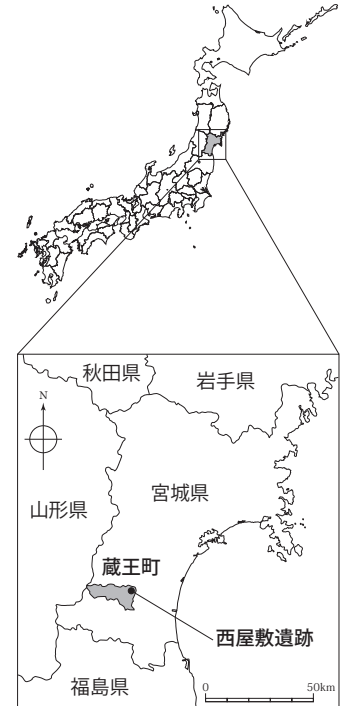
位置 蔵王町は東北地方南部太平洋側、奥羽脊梁山脈に連なる蔵王連峰の東麓に位置する（第1図）。行政区分では宮城県南西部の刈田郡に属し、西側で山形県境と接する。県庁所在地の仙台市からは南西約30kmの距離にある。明治22年の市町村制の施行以前は宮・曲竹・矢附・円田・塩沢・平沢・小村崎の7か村に分かれていたが、単独の宮村とこれ以外の6か村を合併した円田村に再編された。昭和30年には宮・円田村が合併して町制施行され、現在の町域となった。町域は東西に長く、東西23km、南北13km、面積152.83km²である。

地形・地質 町域内の海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が南東部の松川と白石川の合流点で20mを測る。大まかに見ると、西部は蔵王連峰の山岳地帯（標高500m以上）と高原地帯（標高300～500m）、東部は丘陵地帯（標高300m以下）となっており、町域を貫流する河川流域に小規模な盆地と河岸段丘からなる平野を擁する（第2・4図）。

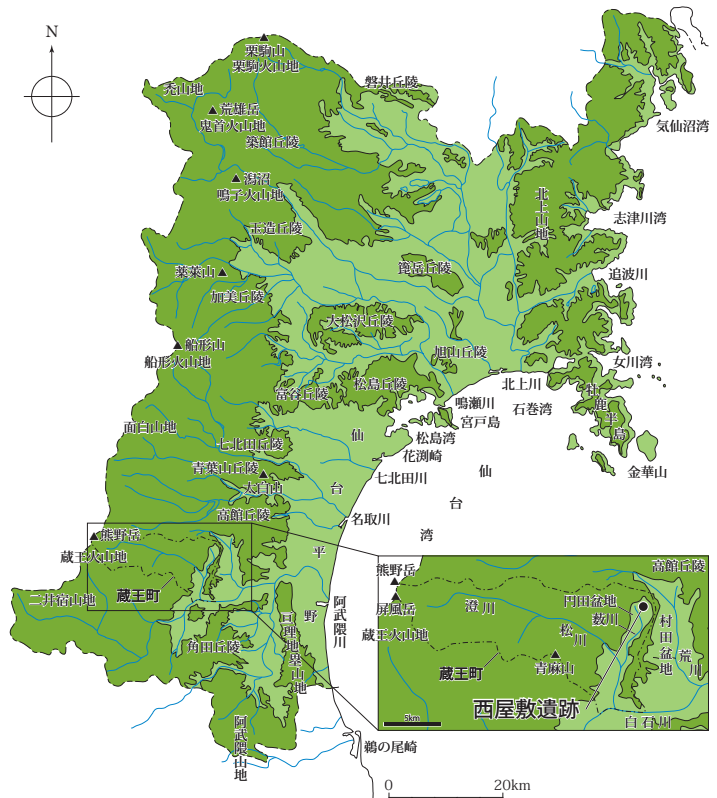
地目別に見ると町域の57.1%(87.6km²)は山林であり、田が7.2%(11.0km²)、畑が11.4%(17.5km²)である。山林の約半分にあたる44.5km²が国有林となっている（註1）。果樹栽培と稲作が盛んな地域であり、丘陵部では山林を切り拓いた果樹園や畑がモザイク状に分布し、盆地底面や低位段丘面の平野部が畑や水田として利用されている。また、高原地帯では酪農や高原野菜の栽培を行なう牧草地や畑が拓かれている。

町域の大部分を支配する地形は西部の蔵王連峰の山々と南部の青麻山である。宮城・山形県境を南北に連なる蔵王連峰には多数の成層火山が存在し、青麻山を含む蔵王火山群を形成している（伴ほか2015）。このうち最高峰の熊野岳（1,841m）を中心とする鳥兜山・五郎岳・地蔵山・五色岳・刈田岳などの山々が蔵王山（蔵王火山）と総称されている（註2）。蔵王火山の北方には龍山火山、雁戸山火山、北蔵王火山（神室岳・大東岳など）、南方に南蔵王火山（後烏帽子岳・杉ヶ峰・屏風岳・不忘山など）、冷水山火山、西方に西蔵王火山が隣接し、南蔵王火山の東方に青麻火山が位置する。

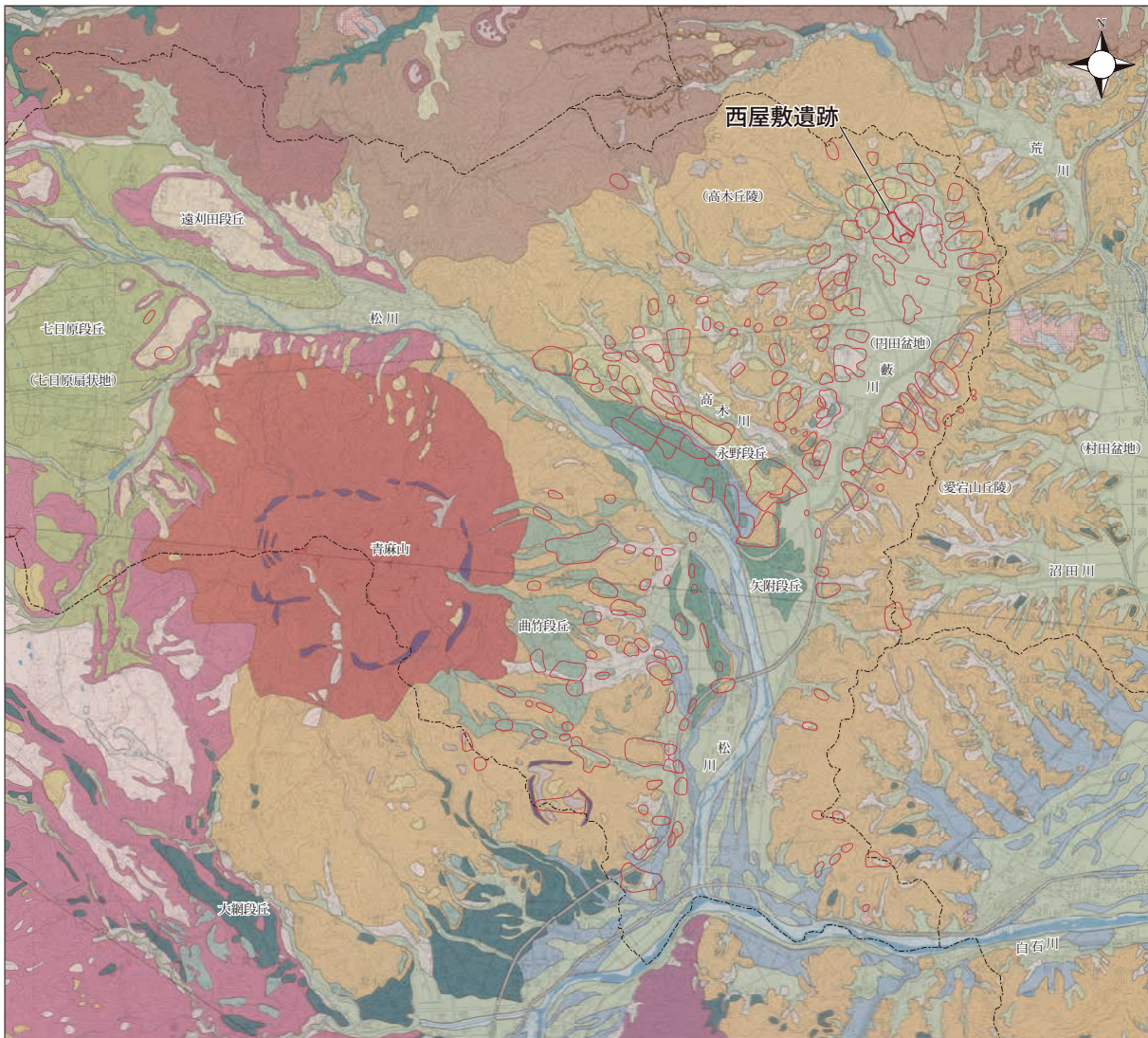
蔵王火山群の活動は約100～200万年前に始まった。最新期の活動は蔵王火山で



第1図 遺跡の位置

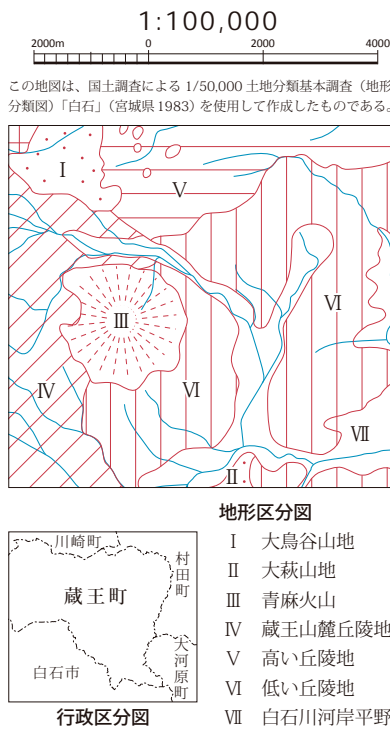


第2図 遺跡の立地



- 山地及び丘陵地**
 (蔵王火山)
 山麓丘陵地
 (青麻火山)
 山地
 尖頂峰
 火山性急崖
 (非火山性山地)
 奥羽山脈の山地(巖々)
 大鳥谷山地
 山頂平坦地(大森付近)
 大萩山山地
 (非火山性丘陵地)
 高い丘陵地
 低い丘陵地
 頂部平坦地
 高位谷底
 旧火山性急崖
- 低地**
 河岸平野・谷底平野
 (後背湿地を区別した区域では自然堤防)
 後背湿地
 河原及び堤内地

- 台地及び段丘**
 高位段丘
 (蔵王東麓段丘群)
 火山泥流台地(弥治郎泥流台地)
 遠刈田段丘
 七日原段丘
 川原子段丘
 蔵本段丘
 大網段丘
 (松川段丘群)
 永野段丘
 曲ヶ竹段丘
 矢附段丘
 低位段丘
- その他**
 人工平坦地(主として切土による部分)
 人工平坦地(主として盛土による部分)
 支倉川流域と荒川流域の間の崖線
- 遺跡**
 遺跡範囲 (蔵王町域内のみ)
- 行政界**
 市町の境界



第3図 遺跡周辺の地形区分

約3.5万年前に始まり、御釜一五色岳火山体を形成した。この活動は現在まで断続的に続いており、歴史時代の噴火記録は東北地方で最多である。山頂周辺では爆裂火口やカルデラ、各火山の噴出物からなる溶岩台地、山麓では火山泥流・火砕流の堆積物からなる火山扇状地などの火山地形が見られる。東方山麓では多数のテフラ層が確認され、最新期活動の中で最大規模の約3万年前の噴火の噴出物(註3)は北東約40kmの仙台市街地周辺まで分布する。山頂周辺の溶岩台地では大規模な高層湿原が見られ、火山地形を開析する松川源流の澄川・濁川は溶岩流末端で滝となって流下し深い峡谷を形成している。青麻火山は30～40万年前の活動で山体を形成した後、開析が進んでいる。

町域の東部を占める丘陵地帯は第三紀層を基盤とする。火山性堆積物に富んだ陸成・湖成層で、後述の円田盆地を中心として陥没構造が認められる(北村1985)。丘陵地を広く覆う薄木層は火砕流堆積物と見られる軽石質凝灰岩を含み(註4)、一部で斜交葉理(クロスラミナ)が観察される。円田盆地西縁に分布する円田層は薄層理の発達した湖成層で、珪藻土を含む(註5)。

こうした地形・地質の基底は中生代白亜紀の花崗岩類と、これを不整合に覆う第三紀中新世の凝灰岩類(グリーンタフ)である。奥羽脊梁山脈では花崗岩の一部が標高約1,490mの名号峰山頂まで、凝灰岩類は標高約1,000m付近まで分布している(註6)。

蔵王連峰と裾野の丘陵地を開析しながら東流する松川は、青麻山の東麓で流路を南へ向けて白石川に注ぐ。町域の東部に河岸段丘面を形成し、北東部では支流の藪川流域に円田盆地を擁する(第3図)。松川河岸段丘群は主に松川左岸で上位から遠刈田段丘面、永野段丘面、矢附段丘面に区分される。また、青麻山東麓では谷底の主面に曲竹段丘面が形成されている。円田盆地は東西1.2km、南北3.5kmの底面を持ち、南を除く三方を丘陵が画する。盆地北側から西側にかけては高木丘陵、東側は愛宕山丘陵と通称されている。盆地内を蛇行しつつ南流する藪川は自然堤防が未発達で、流域に湿地帯を形成した。

西屋敷遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷ほか地内に所在する。町域の東部に位置し、円田盆地北部の低丘陵上に立地している(第3・5図)。

註1. 蔵王国定公園・蔵王高原県立自然公園として自然保護区域が設定されている。

註2. 日本の地質百選「蔵王火山」(日本の地質百選選定委員会・2007年)。

註3. 「蔵王川崎スコリア」(板垣ほか1981)と呼称され、宮城県南部における後期旧石器時代の鍵層となっている。

註4. 薄木層中の軽石質凝灰岩は黒曜石を含む。蛍光X線分析によって「蔵王系黒曜石」と記載され、町内の縄文時代遺跡での利用が確認されている(佐々木2009、杉原ほか2011、鈴木・佐々木2016)。

註5. 明治時代末期から昭和30年頃にかけて盛んに採掘され、「円田珪藻土」として各地に出荷された(町史通史編)。

註6. こうした基盤の隆起の上に形成された蔵王火山は「山の上の火山」、「底上げされた火山」などと表現されている。



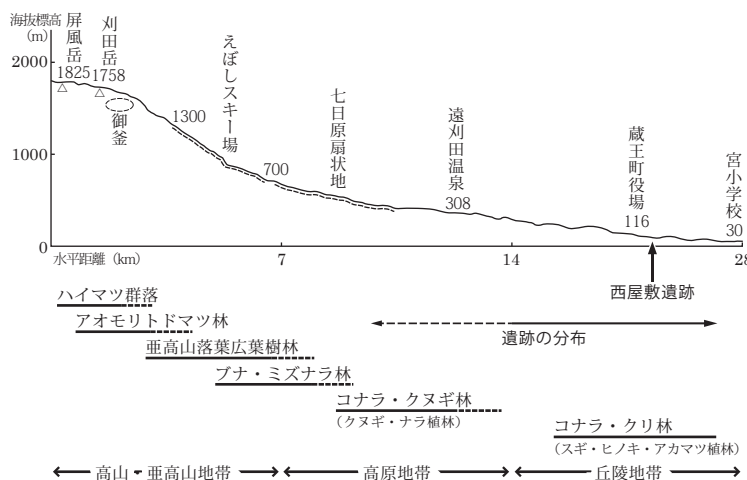
松川中流域の景観



円田盆地の景観



円田盆地を流れる雁柄川(藪川支流)



第4図 遺跡周辺の地形と植生・遺跡の垂直分布

第1章 遺跡の環境

周辺の微地形は低丘陵の懐深くまで小規模な埋没谷地形が複雑に入り組み、低丘陵とこれに連なる微高地上の広範囲に縄文時代から近世にかけての遺跡が分布する。本遺跡は北西から南東方向に伸びる標高約93～103mのやや広い低丘陵上に立地する。遺跡の北西部は周辺の地形面と連続的であるが、南東部では南側と北東側を埋没谷地形で画され、南東側は低湿地となっている。

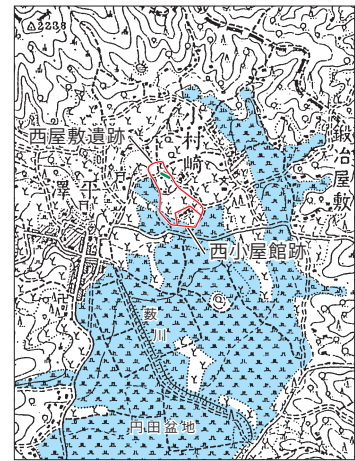
気候 宮城県地方の気候は温帯湿潤気候に区分されるが、西部は奥羽脊梁山脈の、東部沿岸は海洋性気候の影響下にあり、地理的条件による変異が大きい。県南地方の東部沿岸は福島県浜通り地方の気候と共通し、夏季は冷涼で冬季は緯度の割に温暖であるのに対して、蔵王町域を含む西部山沿いは福島県中通り地方の気候と共通し、より寒冷で積雪も多く、豪雪地帯に指定されている。

町域東部の丘陵地帯における平均気温は月別で1.0℃（1月）～24.3℃（8月）、年間で11.8℃である（註7）。年間の降水量1,190mmで冬季の積雪は少ない。隣接地域と比較して冬季でも温暖であり、これを反映して青麻山東麓の標高150m付近ではウラジロガシ林が見られる。高原地帯の平均気温は月別で-1.1℃（2月）～23.4℃（8月）、年間で11.1℃である（註8）。年間の降水量1,624mmで夏季の雨量が多い。晩秋から早春にかけて北西の季節風が卓越し、強風による土壌の風食も見られる。高山地帯の平均気温は月別で-9.9℃（1月）～15.9℃（8月）、年間で2.6℃である（註9）。晩秋から早春にかけて常時強い西風が吹き、40m/sを超えることも珍しくない。こうした厳しい気象条件の下、山頂付近のアオモリトドマツ林では樹氷や霧氷が発達し、刈田岳南東斜面や北屏風岳の広大な北斜面などに一大樹氷原の形成を見る。

町域内の遺跡は大半が気候の穏やかな丘陵地帯に分布し、高原地帯には現在のところ数か所を数えるに過ぎない（第3・4図、註10）。高原地帯に本格的な集落形成が見られるのは、遠刈田温泉地区での鉱山開発や温泉利用、七日原地区での牧場経営などが行なわれる近世以降のことと考えられる。

動植物相 町域東部の丘陵地帯を流れる松川・藪川流域に形成された沖積平野と段丘面、これに面した丘陵地は先史時代以降の主要な人間活動の場として利用されてきた。現在は平野部を中心に水田・畑などの農耕地が開け、丘陵部では畑・果樹園などの農耕地と山林がモザイク状に分布している。丘陵部の山林の多くはスギ・ヒノキ・アカマツの植林地となっているが、概ね1960年代まではコナラ・クリを主体とした落葉広葉樹林で占められていた（第4図）。これらは伐採による萌芽更新など人間の森林利用によって保たれてきた二次林である。蔵王山麓におけるこうした二次林の利用が窺われる事例は、考古学的にも確認されている（註11）。

高原地帯では東部にコナラを主体とした二次林が広がり、近世～近代にかけて多くの木地集落を擁した（註12）。また薪炭の生産も盛んであったが、これらの伐採が進んだ後は卓越風の影響によって植生の回復を見ず（註13）、現在はクヌギ・ナラ・スギ・カラマツなどの植林が試行されている。西部の烏帽子岳中腹にかけては冷温帯落葉広葉樹林の山地帯で、広大なブナ・ミズナラ林が形成されている。ミズナラ林は比較的新期の蔵王山の噴火によってブナ林が破



5万分の1地形図
「白石」(明治43年) 0 1:50,000 1km

第5図 遺跡周辺の地形

註7. 曲竹地区（現蔵王高校・標高100m地点）における1965～1972年の記録（町史通史編所収）による。

註8. 遠刈田温泉地区（遠刈田小学校・標高310m地点）における1966～1969年の記録（町史通史編所収）による。

註9. 遠刈田温泉地区と山形県蔵王温泉地区の実測値を基にした蔵王山頂（標高1840m）の計算値（町史通史編所収）。

註10. 南に隣接する白石市域では、不忘山東麓から青麻山南麓にかけての標高700m付近まで多数の遺跡が分布する。把握されている遺跡の時期は縄文時代早期が多いようである。

註11. セケ宿町小梁川遺跡（縄文時代中期）ではプラスチック土坑の多くで底面直上に炭化物集積層が確認され、352号土坑では多量のトチの種子が含まれていた（宮城県教育委員会ほか1987）。蔵王町十郎田遺跡（13世紀）ではSE66井戸跡から挽物未成品180点が出土し、用材は全てケヤキであった（町14集）。

註12. 遠刈田新地（蔵王町）、青根（川崎町）、弥治郎（白石市）、横川（七ヶ宿町）、蔵王温泉高湯（山形市）など。

註13. 卓越風の影響を強く受ける七日原扇状地は近世においても原野であり、1743年に七日原牧場が拓かれたが厳しい環境下

壊された後に再生した二次林と考えられている。

亜高山帯では常緑針葉樹林のアオモリトドマツ林が広大な森林を形成している。屏風岳東面の断崖には亜高山落葉広葉低木林が分布する。さらに高度を増した高山帯では高木の生育は見られず、ハイマツ低木林が分布する。火山荒原となる山頂付近ではガンコウラン・イワカガミなどの高山植物がカーペット状の群落を形成し、砂礫地にはコマクサも見られる。

こうした植物相を背景として、町域内には大型獣のニホンツキノワグマ・ニホンカモシカ、中小型獣のホンダタヌキ・ホンダギツネ・トウホクノウサギ・ホンドリズ・ホンダイタチ・オコジョ・ムササビ・ネズミ類・モグラ・ヤマネ・コウモリ類などの哺乳動物をはじめとする多様な動物が生息している。

陸水域においては、松川・藪川流域でイワナ・ニジマス・ヤマメ・カジカ・アブラハヤ・コイ・フナ・ドジョウ・ウナギ・ナマス・ニゴイ・サケなど多様な魚類の生息が見られる。ただし強酸性湖の御釜とその浸透水を源流とする濁川では魚類の生息がほとんど見られない。蔵王火山の活動が活発化するたび、濁川から松川と下流の白石川に大量の酸性水が流入して流域の魚類が死滅したり農耕地に被害を与えることがあった。

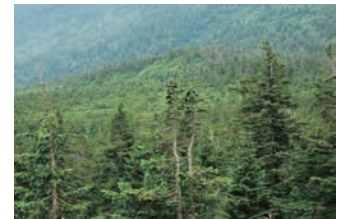
第2節 歴史的環境

刈田地方の歴史 蔵王連峰の東麓に位置する刈田地方（註14）の地形が造り出す景観について、「刈田郡誌」では「郡下至るところ連丘連山起伏し、谿谷溪流を見る。この一圓の水を聚めて阿武隈川に運ぶもの即ち水清く、石白き白石川にして、其本流支流に沿って、管内各村を往訪すべき諸道開けたり…」と記している（刈田郡教育会1928）。蔵王連峰に連なる広大な山地・丘陵と、これを隈なく開析する大小の河川は多種多様な動植物を育み、先史時代には人類の豊かな生活基盤となっていたことが濃密な遺跡分布から窺える。歴史時代には軍事上の要衝として数多くの城館が構築され、しばしば戦乱の舞台ともなった。一方で農耕地が狭小である上に低地は洪水の常襲地帯で、時折集落や田畑の流失もあり、交通の難所でもあった。また、蔵王山の噴火による降灰や泥流被害の記録も数多く残されている。

刈田郡に関する最古の記録は、「続日本紀」に記された養老5年（721年）の陸奥国刈田郡建置に関する記事である。これによると刈田郡は柴田郡のうち二郷を分割して設置され、仙南地方では最も遅い建郡であった。陸奥国は7世紀半ばに亘理・伊具地方を北辺として成立し、7世紀後半頃には大崎平野周辺までその範囲を広げたと考えられている。このため、柴田・刈田郡周辺は陸奥国成立後の早い段階で律令政府の安定した統治下に置かれたであろう。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配下にあったとみられ、丈六阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂が建立された（註15）。また、奥州合戦について「吾妻鏡」の伝えるところでは、文治5年（1189年）に藤原泰衡軍は刈田郡根無藤（蔵王町円田）に城郭を構え、四方坂（同平沢）との間で源頼朝軍と進退七度に及

での経営は困難を極めた（「片倉代々記」など・町史資料編Ⅱ所収）。牧場経営は近代まで続いたが振るわず、明治後期にはスギ・クヌギなどの植林事業に転じた（町史通史編）。戦後は引揚者の入植などによって開拓が進み、現在は牧草地や畑としての利用が多い。



アオモリトドマツ林



馬の背カルデラと御釜火口

註14. 現在の行政区分では宮城県南西部の刈田郡蔵王町・七ヶ宿町、白石市にあたる。

註15. 阿弥陀堂の創建時に植えられたと伝わる参道杉並木の1本が平沢字丈六地内に現存する（県指定天然記念物「平沢弥陀の杉附戒石銘」）。丈六阿弥陀如来坐像は地区内の保昌寺に現存する（県指定文化財）。



丈六阿弥陀如来坐像

第1章 遺跡の環境

ぶ戦いの末に敗退したという。このことから、当時この地域が軍事上重要視されており、近世の笹谷街道の一部となる根無藤から四方坂を経る道筋が、既に出羽国へ至る出羽道の一部として機能していたことが窺える。

鎌倉時代以降は白石氏（刈田氏）が刈田郡の中心勢力であった。白石氏は南隣の伊達郡を本拠とする伊達氏との関係が深く、戦国時代には伊達氏の傘下に組み込まれた。天正18年（1590年）に豊臣秀吉による奥州仕置で刈田郡は伊達領と確定されたものの、翌年の再仕置で伊達政宗が岩出山城へ移封され、刈田郡は長井・信夫・伊達などの各郡とともに会津黒川城に入封した蒲生氏郷に与えられた。慶長3年（1598年）には蒲生氏に代わって会津に入封した上杉景勝の領地となり、家臣甘粕備後景継が白石城主となったが、政宗は慶長5年（1600年）に徳川家康の意を受けて上杉氏を押さえるため白石城を攻めて奪還し、刈田郡は仙台藩領となった。政宗は慶長7年（1602年）に重臣・片倉景綱を白石城主とし、藩境西南の固めを任せた。以後は代々片倉氏が白石城主を務め、江戸時代を通じて刈田郡の過半は片倉氏の知行地であった。

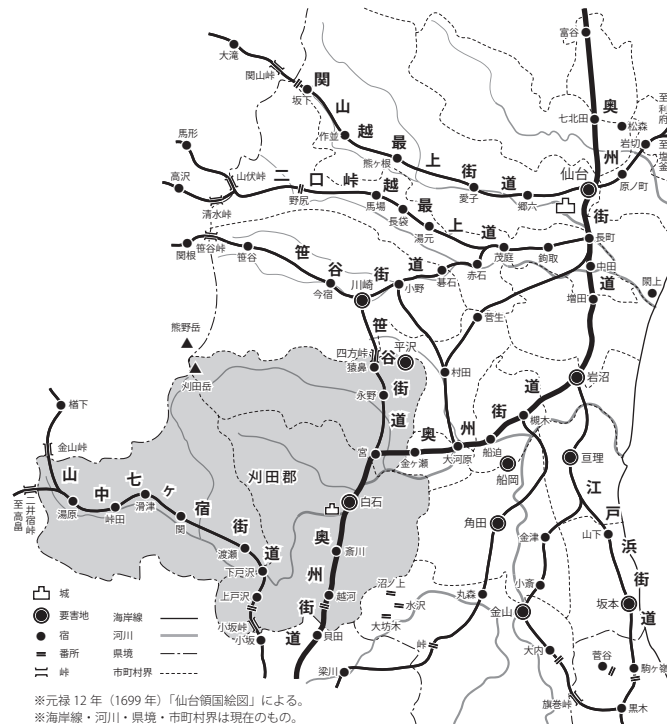
江戸時代には奥羽山脈を挟んで陸奥国を奥州街道、出羽国を羽州街道が縦貫しており、刈田郡内にも奥州街道が白石城下を通過していた。また、奥州街道の宮宿（蔵王町宮）から分岐して永野宿・猿鼻宿・四方峠（同円田）を經由し、笹谷峠を越えて山形の羽州街道へ抜ける笹谷街道も設けられていた（第6図）。

遺跡の概況 町域内における周知の遺跡は現在203か所を数える。その多くは町域東部の平野・丘陵地帯に分布し、①青麻山東麓の丘陵と段丘上、②松川北岸の段丘と支流の高木川流域の丘陵上、③円田盆地に接する丘陵上に集中域を形成する。なお、町域西部の高原地帯では七日原扇状地の扇端部に少数の遺跡が分布する。これらの遺跡のほとんどは、複数の時代や時期区分に比定される活動痕跡が重複する複合遺跡であるが、時代や時期ごとの分布には一定の傾向が認められ、主に生業形態の変化を反映している。

各遺跡に残された活動痕跡を時期区分別に集計するとその総数は延べ535か所を数え、時代・時期ごとの人間活動の動態を窺い知ることができる（第7図）。各時代・時期区分の時間幅は均等でないため単純な比較は出来ないものの、ある程度考慮しながら見ていくと後期旧石器時代・縄文時代草創期を低調期、縄文時代早期・中期、弥生時代中期を増加期、縄文時代前期・晩期を減少期と位置付けることが可能である。弥生時代後期以降の活動は比較的安定的に推移したように見えるが、仔細に見ると古墳時代後期前半、平安時代後半の低調期、平安時代前半、中世前半の増加期を含んでいる。このように、町域内の人間活



平沢弥陀の杉



第6図 刈田郡周辺の街道（風間1983原図）



笹谷街道の古道（四方峠付近）



槍先形尖頭器（前戸内遺跡）

動の動態は幾度かの消長を繰り返してきたことが知られ、それぞれ当時の当地域における社会状況を反映したものと考えられる。以下、各時代・時期ごとに主要な遺跡の活動痕跡について概観する。

旧石器時代 松川右岸の段丘上に持長地遺跡など3か所の活動痕跡が認められる。いずれも単独出土・採集資料のため、帰属時期や活動の内容には不明な点が多い(註16)。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層下部からナイフ形石器1点が単独出土している(宮城県教育委員会1980)。珪質頁岩製の石刃を素材として両側縁下部にブランディングを施す基部加工ナイフ形石器である。また、鉄砲町遺跡では珪質頁岩製の石刃を素材とする彫刻刀形石器1点などが採集されている(註17)。近隣では村田町の新川流域を中心とする玉髓原産地に後期旧石器時代の遺跡が点在し、原産地遺跡群を形成している(新川流域遺跡群・大場2004)。名取市の高館丘陵東部に立地する野田山遺跡では、珪質頁岩製の石刃石器群が出土している(名取市教育委員会ほか2002)。

縄文時代 青麻山東麓から松川左岸にかけての段丘・丘陵上などに延べ204か所の活動痕跡が認められ、各時期の集落立地の傾向に違いが見られる。

草創期は明確な活動痕跡に乏しいが、円田盆地の前戸内遺跡で珪質頁岩製の槍先形尖頭器1点が採集されている(註18)。近隣では白石市高野遺跡で槍先形尖頭器、小菅遺跡・戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている(白石市史編纂委員会1976・1979)。

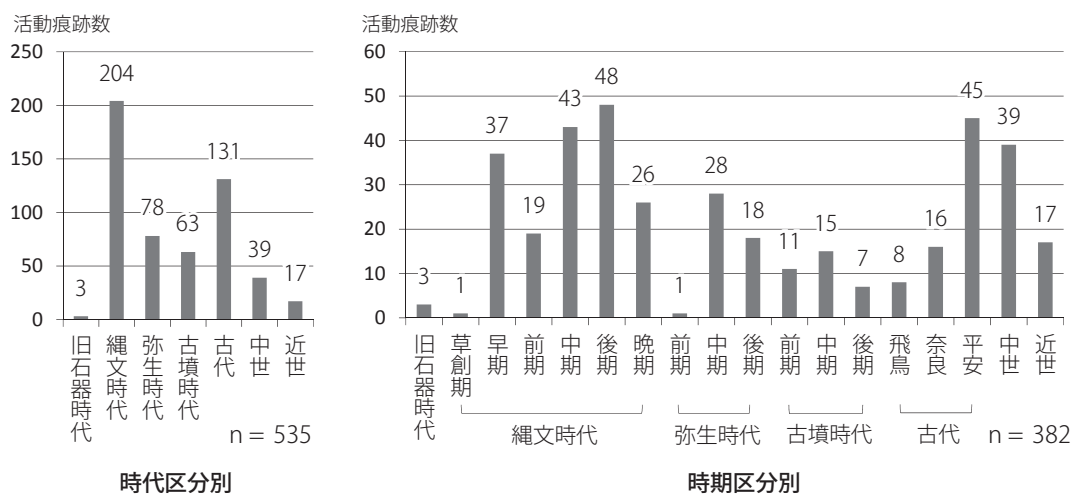
早期は青麻山東麓に沢入D遺跡、松川右岸に明神裏遺跡・上原田遺跡、左岸に手代木遺跡・三本槻A遺跡、円田盆地に磯ヶ坂遺跡、七日原扇状地に北原尾遺跡などがあり、比較的小規模とみられる活動痕跡が広範囲に点在する。明神裏遺跡は明神裏Ⅲ式(林1962)の標識遺跡である。近隣では白石市の不忘山東麓から青麻山南麓にかけて比較的多数の遺跡が点在する。

前期は松川右岸に上原田遺跡・長峰遺跡、左岸に西浦遺跡・上曲木B遺跡、七日原扇状地に七日原遺跡などがあり、青麻山東麓から松川左岸にかけての段丘上に多く分布する。

註16. 宮城県遺跡地名表によれば明神裏遺跡で「細石器」、乙当地遺跡で「旧石器」の記載があるが詳細は不明である。

註17. 「鉄砲町遺跡出土」とされるのみで発見の経緯や地点は不明であったが(町史資料編1)、三日月形尖頭器・石刃各1点(いずれも所在不明)とともに青麻山東麓の「吾戸圃」の低平な残丘上で1961年頃の土取り工事の際に発見されたものと判明した(相原2016)。現在この地名は残されていないものの、「我が戸橋」の存在から現在の宮字沢田地内に比定される。詳細な地点が不明なため、宮城県遺跡地名表には記載されていない。

註18. 遺跡の西側から南面を流れる沢で採集されたものとされ、石器が本来含まれていた地点は不明である(町史資料編1)。また、青麻山東麓の下別当遺跡で採集された大形の槍先形尖頭器1点も当該期の可能性がある(町史資料編1)。このほか、「明神裏遺跡採集」とされた槍先形尖頭器1点(白石市教育委員会1968)は、その後「出土地不明(白石市周辺)」とされている(白石市史編纂委員会1976・1979、蔵王町史資料編1)。



※各時代・時期区分の時間幅は均等ではない。また、時期区分が不明な活動痕跡があるため、時代別の合計と時期区別の合計は一致しない。

第7図 蔵王町域の遺跡における活動痕跡の動態

第1章 遺跡の環境

中期は松川右岸に上原田遺跡・二屋敷遺跡、左岸に谷地遺跡・寺門前遺跡・高木遺跡・鞆山遺跡・湯坂山B遺跡などがある。多くの遺跡が立地する松川左岸の段丘面は三段に区別されており、上位の遠刈田段丘面に湯坂山B遺跡、中位の永野段丘面に高木遺跡・鞆山遺跡、低位の矢附段丘面に谷地遺跡と寺門前遺跡が立地する(註19)。谷地遺跡では中期前半(大木7b・8a式期)の住居跡14軒、貯蔵穴55基、遺物包含層などを確認している。土偶や硬玉製垂飾品などを含む大量の遺物が出土している(町20集)。鞆山遺跡では中期中葉(大木8a・8b式期)の住居跡5軒、貯蔵穴31基などを確認している。住居は貯蔵穴・柱穴群を囲むように配置されていた可能性がある。湯坂山B遺跡では中期後葉(大木9・10式期)の住居跡23軒、貯蔵穴13基などを確認している。住居の多くは複式炉を伴い、土笛などを含む多量の遺物が出土している。二屋敷遺跡では中期末葉(大木10式期)の住居跡5軒などを確認している(宮城県教育委員会1984)。

後期は青麻山東麓に山田沢遺跡、松川右岸に二屋敷遺跡、松川左岸の西浦B遺跡などがあり、青麻山東麓から松川兩岸の段丘面に多く分布する。二屋敷遺跡では後期初頭～前葉(綱取Ⅱ式期)の炉跡10基、土器埋設遺構、配石・立石遺構、捨て場遺構などが確認されている(宮城県教育委員会1984)。西浦B遺跡でもほぼ同時期の住居跡1軒、建物跡23棟、貯蔵穴30基などを確認している。遺構群は中央部の空白域を囲むように緩やかな環状に配置される。三十稲場式、門前式など異系統土器が散見され、新潟県板山産と判別された黒曜石製石鏃1点が出土している(町10集)。

晩期は青麻山東麓に下別当遺跡・願行寺遺跡・鍛冶沢遺跡などがあり、青麻山東麓の沢地形に面した段丘上に多く分布する。鍛冶沢遺跡では後期末～晩期末にかけての土坑墓・土器埋設遺構・建物跡・住居跡などの遺構群が確認され、建物群は広場を囲むように弧状に配置されていた(宮城県教育委員会2010)。また、鍛冶沢遺跡で中空土偶(仙台市博物館蔵)、願行寺遺跡で屈折土偶(町指定文化財)が採集されている。

弥生時代 78か所の活動痕跡が丘陵地帯の広範囲に点在する。前期は明確な活動痕跡に乏しいが、青麻山東麓の鍛冶沢遺跡では、縄文時代晩期から継続する墓域で再葬墓が確認されている(宮城県教育委員会2010)。中期は松川左岸の西浦遺跡、円田盆地の大橋遺跡・立目場遺跡・都遺跡などがある。この時期になると、松川左岸から円田盆地にかけての丘陵・段丘・微高地上に多く分布するようになり、遺跡分布上の大きな画期となっている。西浦遺跡は円田式(伊東1955)の標識遺跡である。都遺跡では粃殻圧痕のある土器片が出土している(町3集)。後期は円田盆地の愛宕山遺跡・天王遺跡・赤鬼上遺跡・磯ヶ坂遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に多く分布する。

古墳時代 63か所の活動痕跡が認められる。多くは円田盆地の丘陵・微高地上に集中しており、一部が松川・白石川の合流点付近の丘陵上に分布する。前期は大橋遺跡・堀の内遺跡などの集落が円田盆地の丘陵上に立地する。中期の集落は中沢A遺跡・台遺跡など円田盆地の丘陵上に立地するものと、都遺跡・

註19. 寺門前遺跡では平成23年度の遺構確認調査で中期前葉(大木7b・8a式期)の遺構群を確認している(町18集)。県道を挟んで隣接する谷地遺跡と一体の遺跡と考えられる。



縄文土器(谷地遺跡・縄文時代中期)



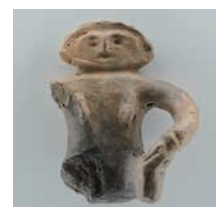
縄文土器(鞆山遺跡・縄文時代中期)



竪穴住居跡(湯坂山B遺跡・縄文時代中期)



掘立柱建物跡群(鍛冶沢遺跡・縄文時代晩期)



土偶(願行寺遺跡・縄文時代晩期)



長頸壺(西浦遺跡・弥生時代中期)

窪田遺跡のように盆地底面の微高地上に立地するものがある。町内の古墳の多くはこの時期に属し、円田盆地の丘陵上に夕向原古墳群・古峯神社古墳・宋膳堂古墳など、青麻山東麓の松川・白石川の合流点付近の低丘陵上に明神裏古墳がある。後期の明確な活動痕跡は未確認である。

古代 131か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上に集中し、青麻山東麓から松川左岸にかけての丘陵・段丘・微高地上の広範囲には比較的小規模とみられる活動痕跡が点在する。飛鳥時代は塩沢北遺跡・十郎田遺跡など、奈良時代は堀の内遺跡・六角遺跡・都遺跡などが円田盆地の丘陵・微高地上に立地する。微高地上に立地し材木堀・大溝による区画施設を伴う十郎田遺跡は囲郭集落で、都遺跡は寺院または官衙の可能性ある（町3・13・19集）。平安時代は円田盆地に前戸内遺跡・東山遺跡など、青麻山東麓に青竹遺跡・観音堂山遺跡などがあり、丘陵地帯の広範囲に点在する。前戸内遺跡では、住居跡14軒、建物跡21棟を確認している。集落内には建物跡が逆L字形に配置される一角があり、豪族居宅と考えられる（町16集）。

中世 39か所の活動痕跡が認められる。このうち15か所は城館跡で、青麻山東麓から円田盆地西縁にかけての丘陵上に点在する。また、城館跡の周辺を中心に段丘・微高地上で屋敷跡が確認されている。城館跡は、青麻山東麓に宮城館跡・山家館跡・館の山城跡など、円田盆地に矢附館跡・兵衛館跡・西小屋館跡などがある。兵衛館跡は円田盆地最奥部にあり、丘陵頂部の平場を画する土塁・空堀が良好に残存する。西小屋館跡は円田盆地北部の微高地上にあり、土塁と水堀を伴う方形館である。また、持長地遺跡は山家館跡、西屋敷遺跡は西小屋館跡に隣接し、武士階級とみられる屋敷跡が確認されている（宮城県教育委員会1980・町15集）。

近世 17か所の活動痕跡が確認されている。円田盆地の平沢館跡は主要部の遺構が現存しないが、「平沢要害屋敷絵図」には本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭的な構造が窺える。車地藏遺跡などでは武士階級の屋敷跡、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡などでは庶民階級の墓地を確認している。遠刈田地区の松川左岸には岩崎山金窟址（町史跡）がある。

現存する近世の建造物としては、青麻山東麓の我妻家住宅（江戸中期、国指定文化財）、奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）、刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、日吉神社本殿（江戸中期）がある。刈田嶺神社は刈田郡総鎮守、白石城主片倉氏の総守護神である。奥州街道の宮宿から分岐して出羽へ至る笹谷街道は町東部を南北に通過し、永野宿・猿鼻宿が置かれた。宮一永野宿間に曲竹一里塚（町史跡）が現存し、円田盆地西側の四方峠付近には古道の一部が保存され往時の景観を偲ばせている。



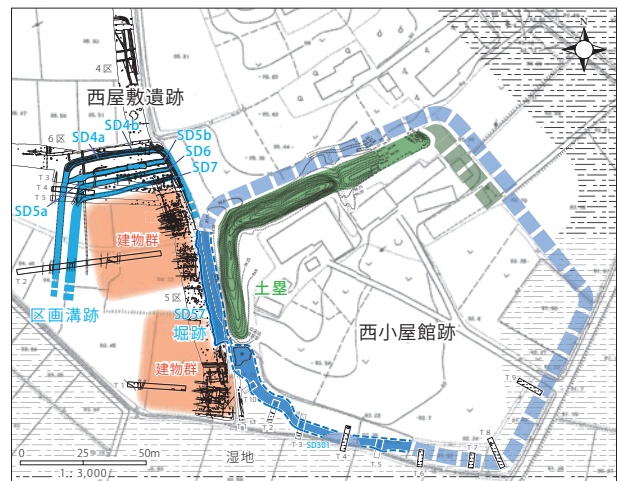
土師器（中沢A遺跡・5世紀前葉）



囲郭集落（十郎田遺跡・7世紀後半）



竪穴住居跡（六角遺跡・8世紀前半）



西小屋館跡・西屋敷遺跡南部の中世遺構



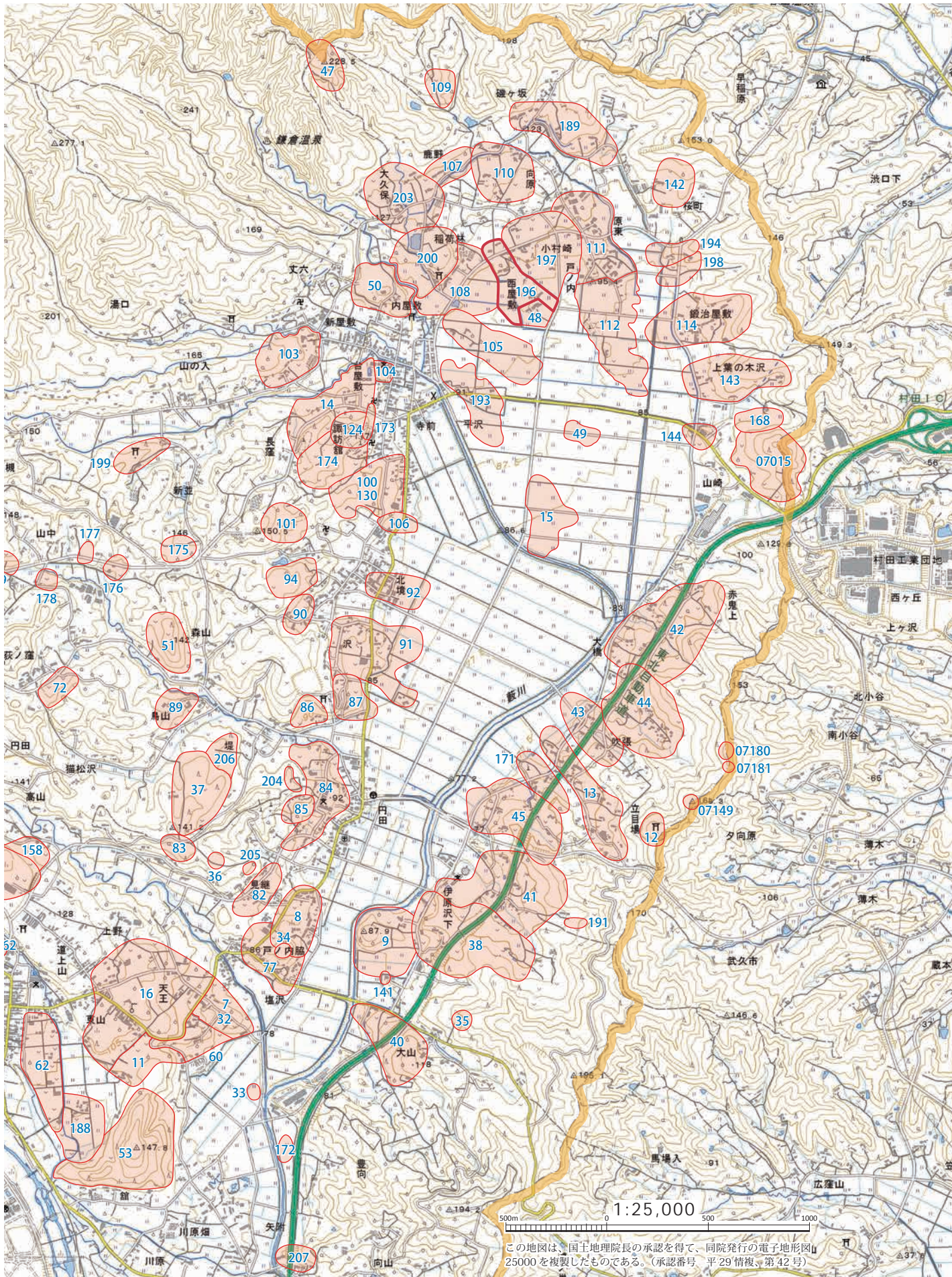
屋敷跡（西屋敷遺跡・中世）



土塁（西小屋館跡・中世）



平沢要害屋敷絵図（部分・近世）



第8図 円田盆地周辺の遺跡

青色数字：遺跡番号（第1表に対応）

第1表 円田盆地周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
7	天王遺跡	散布地	縄文早・中／弥生中・後／古代	104	平沢遺跡	散布地	古代
8	宋膳堂遺跡	散布地	弥生中・後／古墳／平安	105	十郎田遺跡	集落・散布地	縄文／古墳中・後／飛鳥／奈良／平安／中世／近世
9	台遺跡	集落・散布地・水田	弥生中／古墳中・後／平安／中世・近世	106	堂の入遺跡	散布地	弥生／古代／中世
11	下永向山遺跡	散布地	縄文中／弥生中・後／古代	107	大久保東遺跡	散布地	古墳／奈良／平安
12	愛宕山遺跡	集落・散布地	弥生中・後／古墳前・中／古代	108	前戸内遺跡	集落・散布地	旧石器／縄文後／弥生中・後／古墳中／奈良／平安／中世／近世
13	立目場遺跡	集落・散布地	縄文早・前／弥生中・後／古墳前・中	109	鹿野遺跡	散布地	古代
14	諏訪館前遺跡	集落・散布地	縄文晩／弥生／古墳前・中／平安／中世／近世	110	後原遺跡	散布地	縄文／古墳／奈良／平安
15	都遺跡	集落・散布地	縄文後／弥生中・後／古墳前・中・後／飛鳥／奈良／平安／中世	111	原遺跡	集落・散布地	縄文／古墳前／平安／近世
16	上野遺跡	散布地	縄文中／弥生中／平安	112	六角遺跡	集落・墓地・散布地	縄文早／弥生中・後／古墳前・後／奈良／平安／中世／近世
32	天王古墳群	円墳	古墳	114	鍛冶屋敷遺跡	集落・散布地	縄文中・後・晩／古代／近世
33	鉾附神社古墳	円墳	古墳	124	諏訪館跡	城館	中世
34	宋膳堂古墳	方墳	古墳	130	経塚	経塚	中世
35	中屋敷古墳	円墳	古墳	141	西脇古墳	円墳	古墳
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳	142	清上遺跡	散布地	古代
37	花桶館跡	城館	中世	143	上葉の木沢遺跡	散布地	縄文／古墳前／古代／近世
38	塩沢北遺跡	集落・散布地	弥生中・後／古墳中・後／飛鳥／平安	144	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文／弥生／古代
40	大山遺跡	集落・散布地	縄文早／弥生中／古墳前	158	高木B遺跡	散布地	縄文
41	伊原沢下遺跡	集落・散布地	古墳前・中／中世	168	山崎遺跡	散布地	縄文早
42	赤鬼上遺跡	集落・散布地	弥生中・後／平安／中世	171	中沢B遺跡	散布地	弥生中／古墳／古代
43	屋木戸内遺跡	散布地	弥生中／古代	172	豊向遺跡	散布地	古墳
44	大橋遺跡	集落・散布地	縄文後／弥生中・後／古墳前／平安	173	諏訪館横穴墓群	横穴墓	古墳
45	中沢A遺跡	集落・散布地	縄文早／弥生中・後／古墳中・後／古代／中世	174	諏訪館遺跡	散布地	弥生／古墳
47	兵衛館跡	城館・散布地	縄文／弥生／古代／中世	175	新並遺跡	散布地	縄文中
48	西小屋館跡	城館・散布地	平安／中世	176	角山B遺跡	散布地	縄文
49	新城館跡	城館・散布地	弥生／飛鳥／平安／中世	177	角山A遺跡	散布地	古代
50	平沢館跡	城館	中世	178	青木遺跡	散布地	平安
51	築館館跡	城館	中世	188	下永野B遺跡	散布地	奈良／平安
53	矢附館跡	城館	中世	189	磯ヶ坂遺跡	集落・墓地・散布地	縄文早／弥生後／奈良／平安／近世
60	蟹沢遺跡	散布地	弥生中	191	宮ヶ内上遺跡	製鉄	近世
62	東浦遺跡	散布地	縄文中・後／弥生中／古墳／古代	193	窪田遺跡	集落・散布地	縄文／弥生後／古墳中・後／飛鳥／奈良／平安／中世
66	高木遺跡	散布地	縄文中	194	三の輪遺跡	散布地	古墳／奈良／平安／近世
72	荻の窪遺跡	散布地	縄文晩／弥生	196	西屋敷遺跡	集落・散布地	縄文／飛鳥／奈良／平安／中世／近世
77	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中／弥生中／古墳／平安／中世	197	戸ノ内遺跡	集落・散布地	縄文／弥生／古墳／奈良／平安／中世／近世
82	土ヶ市遺跡	散布地	弥生／古代	198	車地藏遺跡	集落・散布地	古代／中世／近世
83	見継遺跡	散布地	縄文	199	三本槻B遺跡	散布地	縄文／平安
84	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文／弥生中・後／古墳前・中・後／奈良／平安	200	稲荷林遺跡	散布地	縄文早／古墳／奈良／平安
85	寺坂遺跡	散布地	平安	203	大久保西遺跡	散布地	古墳／奈良／平安
86	清水上遺跡	散布地	弥生／平安	204	堀の内B遺跡	散布地	弥生／古墳
87	白山遺跡	集落・散布地	弥生／古墳中	205	八幡山東遺跡	散布地	弥生／古代
89	鳥山遺跡	散布地	縄文中／古代	206	堤遺跡	散布地	縄文／弥生／古墳／古代／中世
90	沢遺跡	散布地	古代	207	東山B遺跡	集落・散布地	縄文早・平安
91	本宿前遺跡	集落・散布地	縄文早／弥生中／平安／中世	07015	北割山遺跡	散布地	縄文／弥生
92	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中／弥生／平安／中世／近世	07149	古峯神社古墳	前方後円墳・散布地	古墳
94	北境遺跡	散布地	縄文早／弥生後／古代	07180	夕向原1号墳	前方後円墳・散布地	弥生／古墳
100	小高遺跡	散布地	縄文／弥生／古代	07181	夕向原2号墳	円墳	古墳
101	大柿内遺跡	散布地	弥生				
103	丈六遺跡	散布地	古代				

※番号は宮城県遺跡台帳登録番号のうち、蔵王町の市町村番号05を省略した下三桁を記載している（第8図の青色数字に対応）。
 ※07で始まる五桁の番号は村田町登録分で、蔵王町との境界にまたがって所在するものを記載した。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

西屋敷遺跡 蔵王町北東部の敷川流域は円田盆地と呼ばれる小盆地で、周囲の丘陵や盆底面の微高地に数多くの遺跡が分布する。西屋敷遺跡は蔵王町大字小村崎字西屋敷ほか地内に所在し、縄文時代、古代、中世、近世の集落・散布地として宮城県遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地である（第9図・註1）。県営ほ場整備事業（円田2期地区）の事業計画に伴う平成12年度の分布調査で遺物の散布が確認され、新規登録された。県営ほ場整備事業の区画整理工事に伴い平成14年度に遺構確認調査、平成21年度に事前調査が行なわれ、中世の屋敷跡などが確認されている（県195集、町15・19集）。

文化財保存協議 宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区・宮城県教育委員会文化財保護課・蔵王町教育委員会の関係四者による県営ほ場整備事業（円田2期地区）の文化財保存協議は平成8年度から開始され、平成14年度に蔵王町教育委員会が事前調査計画を策定した。これに基づき平成15・16年度に文化財発掘調査についての依頼書が県大河原地方振興事務所から町教育委員会へ提出され、平成15年度から23年度にかけて町教育委員会が主体となって事前調査を実施している（註2）。

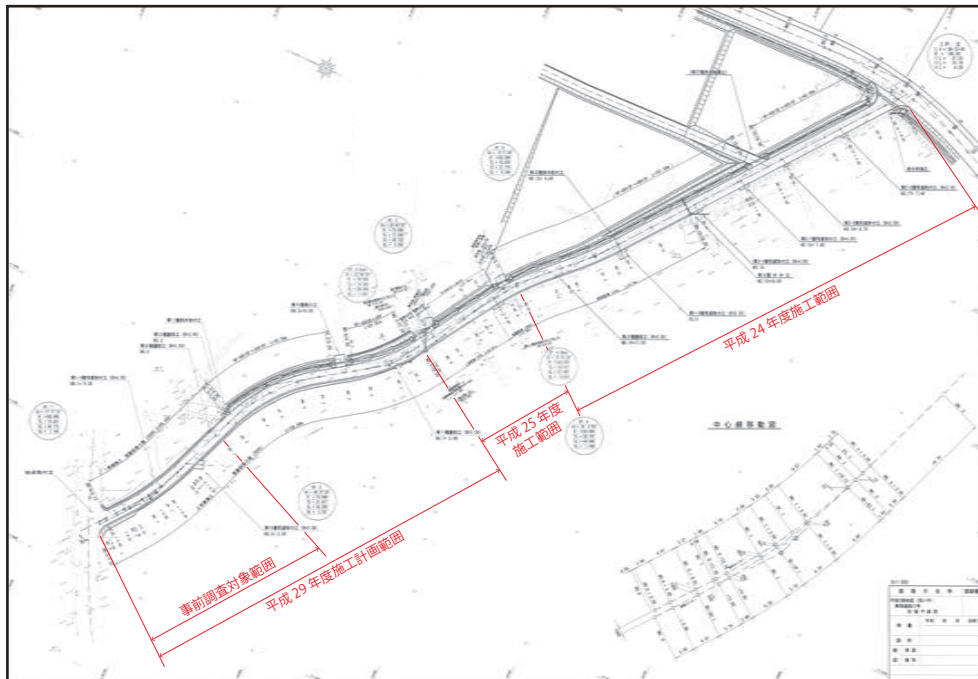
円田2期地区のうち非農用地分については平成17年度に文化財保存協議が開始され、このうち集落道2号線拡幅工事は総延長373.7mの全域が西屋敷遺跡・戸ノ内遺跡とかかわりを持つことが判明した。関係四者で遺跡の保存について協議した結果、既存の生活道路の改良工事であり計画変更の余地が少な



第9図 調査地点位置図

註1. 宮城県遺跡登録番号：05196

註2. 調査対象は15遺跡、発掘調査面積は合計90,795㎡に及んだ（町3・4・6・8・11・13～16・19集）。



第10図 工事計画図 (S=1/1,500)

いことから、遺構確認調査（註3）を実施して遺構の分布が確認された場合は工事前に事前調査（註4）を実施して記録保存を図ることで合意した。

その後、隣接地で実施した戸ノ内遺跡の発掘調査（平成19年度・円田2期地区・町8集）と西屋敷遺跡の確認調査（平成21年度・個人住宅・町18集）によって、集落道路2号線の南側部分は埋没谷地形にあたり遺構が分布する可能性が低いと考えられた。この成果に基づいて、東部の延長171.2m分を平成24年度に慎重工事（註5）で、中央部の延長45.9m分が平成25年度に町教育委員会の工事立会（註6）により施工された（第10図）。

平成26年度には県大河原地方振興事務所から町教育委員会に西部の延長156.6m分の施工計画が提示された。施工区域は丘陵部にあたり遺構が分布する可能性があることから、用地買収に伴う現地の杭打ち作業が完了した段階で拡幅部の遺構確認調査を実施することになった。

遺構確認調査 協議の結果を受けて、県大河原地方振興事務所から町教育委員会へ遺構確認調査の実施が依頼された。調査は平成27年4月6日から8日にかけて実施した。調査トレンチは現道南側の拡幅予定部分の畑地に7か所を配置した。この結果、工事計画延長156.6mのうち、西部の延長約60mの範囲で溝跡・土坑・柱穴などの遺構が分布することが判明した。これより東部については埋没谷地形となっており遺構は分布しないと判断された。この結果をもとに協議した結果、遺構の分布が確認された範囲の約420㎡を対象として工事前に事前調査を実施することで合意した。

事前調査 事前調査実施の合意に基づき、平成28年6月30日に県大河原地方振興事務所を委託者、蔵王町を受託者とする発掘調査業務委託契約を締結し、町教育委員会が発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は現地の調査実施に関する条件整備が整った同年10月24日に着手し、12月22日に終了した。

整理作業 整理作業は平成28年度の野外調査の成果を受けて翌年度に実施することとし、平成29年6月9日に県大河原地方振興事務所を委託者、蔵王町を受託者とする発掘調査とりまとめ業務委託契約を締結した。整理作業は町文化財整理室で行ない、同年6月12日に着手した。

第2節 調査の方法と経過

調査前の現況 事業計画地の現況は現道部分が幅員約2.0mのアスファルト舗装で、拡幅部分は南側が畑地及び山林、北側が宅地及び水田であった。計画地付近の標高は約100mで、地形は南東方向に緩く傾斜し、北東側はさらに一段低く水田として利用されている（第11図）。計画地と周辺の地表面には少量の土師器・陶磁器片の散布が見られた。本遺跡では平成21年度に県営ほ場整備事業（円田2期地区）の区画整理工事に伴って発掘調査を実施しており、西小屋館の西辺を区画した堀跡の一部とこれに隣接して営まれた中世の屋敷跡（9ページ挿図）、平安時代の掘立柱建物跡・井戸跡、堆積層に飛鳥時代後半の遺物を含む流路跡などを確認している（町15・19集）。

註3. 周知の埋蔵文化財包蔵地内において遺構の平面・垂直的な分布状況を把握する目的で実施するトレンチ調査。対象地の微地形を考慮しながら遺構の分布が予想される地点を中心に任意でトレンチを配置する。これにより遺構・遺物の包含深度や面積あたりの密度、包含環境を把握するとともに遺構の規模や性格を予想し、文化財保存協議の材料とする。また、事前調査を実施する場合の調査方法や期間、費用等の積算根拠とする。

註4. 工事の実施前に文化財保護法に基づく記録保存の措置を講ずるために行なう発掘調査。工事によって埋蔵文化財が直接的に破壊される場合のほか、工事が影響を及ぼしたり、恒久的な工作物の設置によって以後の調査等が困難になると判断された場合に行なう。

註5. 事業者が慎重に工事を実施すること。工事が埋蔵文化財を損壊しない範囲内で計画され、発掘調査や工事立会の必要ないと判断された場合に行なう。

註6. 町教育委員会の埋蔵文化財担当職員が、工事の実施中に立ち会うこと。工事が埋蔵文化財を損壊しない範囲内で計画されているが、現地で状況を確認する必要がある場合、又は対象地が狭小で通常の実掘調査を実施できない場合に行なう。



調査前現況（北西から）



調査前現況（南東から）

第2章 調査の経緯

遺構確認調査 遺構確認調査は平成27年4月6日から8日にかけて実施した。道路拡幅計画範囲のうち、現道南側の畑地にトレンチ7か所を設定して調査を実施した(第12図)。トレンチ掘削部の面積は合計約108㎡であり、事業計画地の約8.3%にあたる。

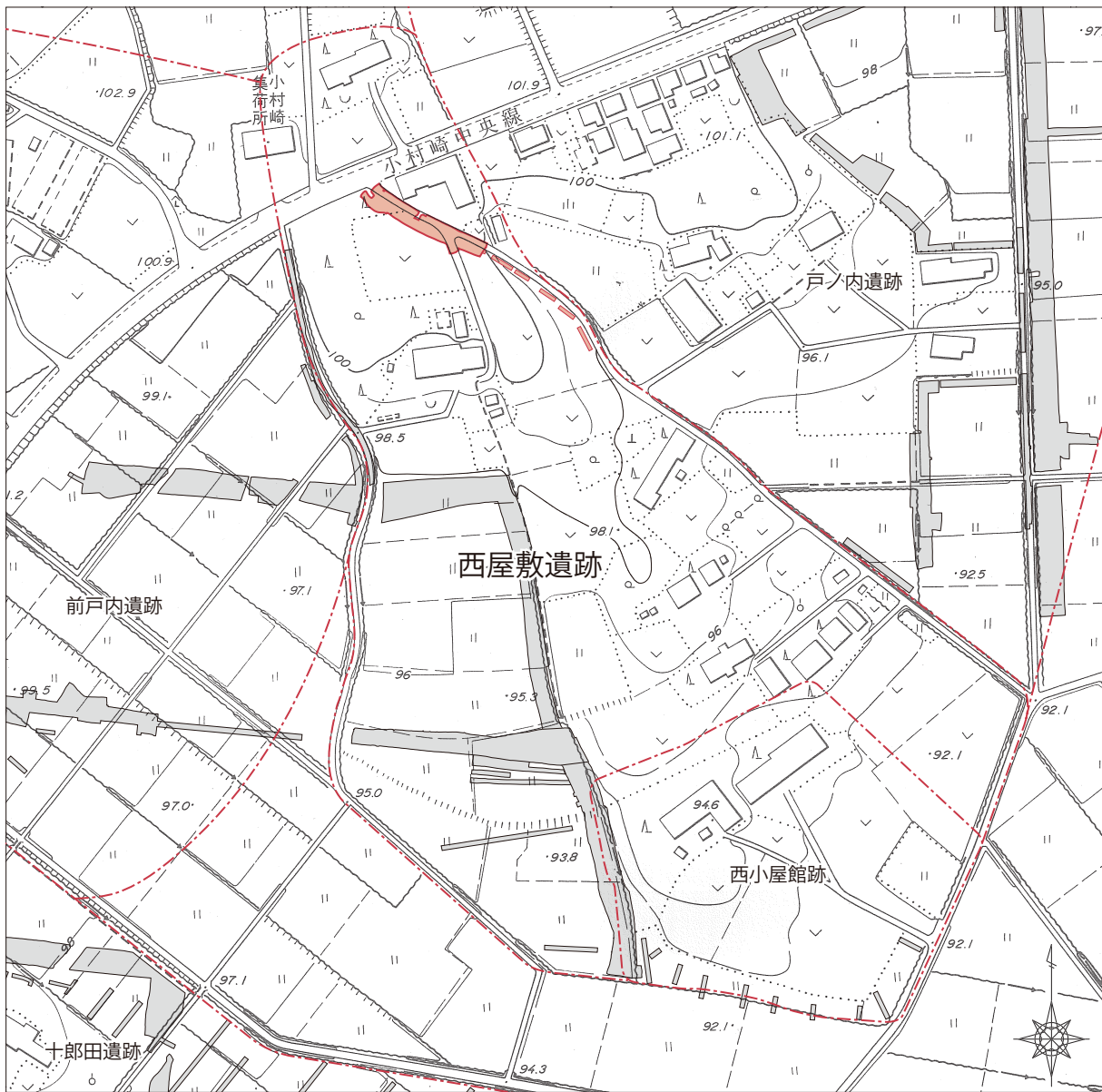
調査で確認した基本層序は、Ⅰ層：表土(耕作土)、Ⅱ層：黒色シルト(黒ボク土)、Ⅲ層：暗褐色シルト(漸移層)、Ⅳ層：黄褐色ロームで、遺構確認面はⅣ層上面である。6トレンチ西部で埋没谷地形の傾斜面を確認し、これより東側の1～5トレンチと6トレンチ南東部ではⅠ・Ⅱ層の堆積が厚く、下部は湿地性の黒色粘質シルトとなっており、著しい湧水が見られた。また、西側の7トレンチではⅠ層の直下がⅣ層の削平面となっており、過去の畑地の造成による影響が見られた。このことから、調査地点の旧地形は西部が舌状丘陵基部の平坦面、東部が小規模な埋没谷地形に面した舌状丘陵辺縁部の北東向き



遺構確認調査(6トレンチ・西から)



遺構確認調査(7トレンチ・東から)



第11図 調査区配置図

緩斜面となっていることが判明した。

遺構は6トレンチ北西部と7トレンチで溝跡1条、土坑7基、柱穴7基を確認し、調査地点西部の平坦面に遺構が散漫に分布することが判明した。

事前調査の経過 事前調査は、事業計画範囲のうち遺構確認調査で遺構の分布が確認された西部の約420㎡を対象として平成28年10月24日から12月22日にかけて実施した。調査対象範囲に隣接する住宅等の通行を確保する必要から調査区を二分割して反転調査を実施することとし、西側に1区、東側に2区を設



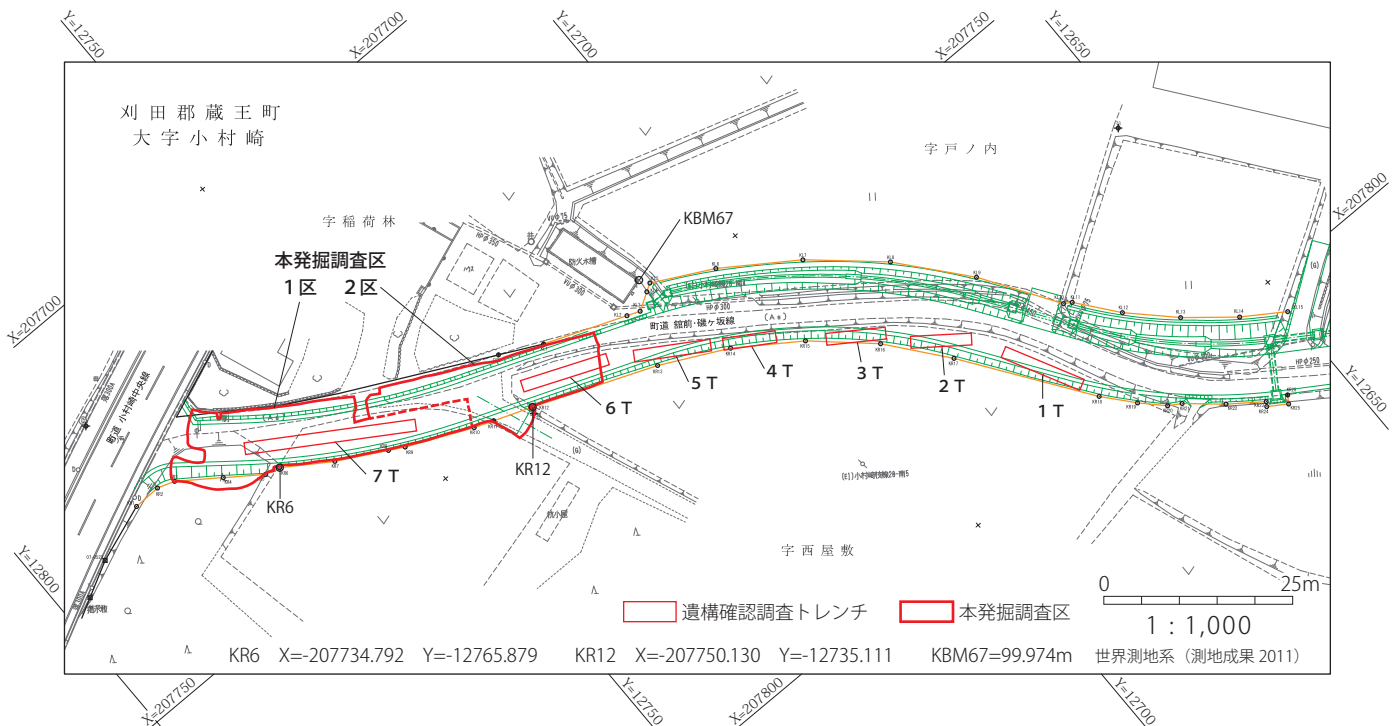
遺構確認状況（6トレンチ・西から）



遺構確認状況（7トレンチ・西から）



調査地点全景（遺構確認調査時・パノラマ合成写真・東から）



第12図 調査区設定図

第2章 調査の経緯

定した。調査は1区から着手し、重機掘削を10月25日から開始した。現道部分の舗装材を除去したところ、路盤材の碎石層は薄く、地山の黄褐色ローム層が露出した。また、拡幅部分のうち山林となっていた西部の町道小村崎中央線との取り付け部分では、地下の遺構を損傷しないよう、伐採された樹木の根株を残しながら掘削を行なった。重機掘削は10月26日に終了し、翌27日から作業員による遺構確認作業を開始した。この結果、竪穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑6基、柱穴41基を確認し、順次精査と記録作業を行なった。1区の遺構精査と記録作業は現道部分から優先的に実施し、西部の取り付け部分以外の遺構精査が完了したことから11月28日から30日にかけて重機による埋め戻しと掘削を行なって調査区の反転を実施した。埋め戻しが完了した1区の現道部分には碎石の敷設と転圧を行なって道路の仮復旧を行ない、隣接する住宅等の通行を確保した。2区では11月30日から作業員による遺構確認作業を開始し、竪穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑2基、柱穴17基を確認し、順次精査と記録作業を行なった。1区西部の取り付け部分と2区の遺構精査および記録作業は12月15日までに終了し、12月20～21日に重機による埋め戻し作業を行なって現地調査を完了した。

事前調査の方法 調査の方法は重機掘削により表土を除去した後、作業員による遺構確認作業を実施した。確認した遺構は調査員が堆積土層の断面観察を行ないながら作業員による掘り下げを行ない、遺構の検出、土層断面、床面検出、完掘などの工程ごとに調査員による写真撮影および図面記録等を実施した。写真撮影は2400万画素の一眼レフデジタルカメラを使用し、RAWデータにより記録した。出土した遺物は必要に応じて写真撮影および図面記録を行いながら出土位置・層位等を記録して取り上げた。各遺構は土層断面記録用に打設した任意のセクションポイントを基準として20分の1縮尺の平面図を作成し、遺構精査完了後に調査区全体の平面図を100分の1縮尺で作成した。なお、使用した基準点の公共座標（日本平面直角座標第X系）による測量成果は事前に県大河原地方振興事務所から提供を受けた。

事前調査の成果 最終的な調査面積は約420㎡であり、調査期間は10月24日から12月22日までの約2ヶ月間を要した。確認した遺構は竪穴住居跡4軒、土坑8基、溝跡4条、柱穴59基の計75か所である。遺物は竪穴住居跡、土坑、溝跡などから土師器26点、ロクロ土師器3点、須恵器8点、弥生土器4点、石器4点、礫石器3点、石製品1点、陶磁器10点、古銭1点の計60点（整理箱1箱分）が出土した。

第3節 整理の方法と経過

整理作業の経過 整理作業は、町文化財整理室で平成29年6月12日から実施した。整理作業の内容は、基礎整理（出土遺物の洗浄・注記、調査写真・図面・記録類の整理）、本整理（出土遺物の観察・分類・抽出・実測・トレース・写真撮影、遺構配置図・遺構図トレース）、報告書刊行（遺物実測図・遺構図・



交通規制



重機掘削



遺構確認作業



遺構掘削作業



遺構記録作業



埋め戻し



道路仮復旧

写真図版作成、観察表作成、本文執筆・編集)である。

基礎整理では、出土遺物の水洗洗浄と注記を進める一方、事前調査で各遺構を担当した調査員が遺構調書を作成し、調査中に記入した遺構台帳・遺物取り上げ台帳と合わせて整理作業の基礎資料として整備した。また、遺構等の写真についてはRAWデータのデジタル現像処理を行ない、撮影時に記入した写真台帳に基づいて撮影日別および遺構別に整理した。

本整理作業では、調査員が遺物観察を行ない、遺物の特徴や出土状況を考慮しながら資料化の対象とする遺物を抽出した。抽出した遺物については、特徴や残存状況に応じて実測図及び拓本を作成した。実測図については、デジタル写真実測と手実測を組み合わせながら作成し、最終的にすべてデジタルトレースにより完成させた(註7)。実測図等の作成が終了した遺物については、デジタル一眼レフカメラを用いて報告書掲載用の写真撮影を行なった。遺構図については、すべてデジタルトレースにより作成した(註8)。

上記の作業と並行して報告書掲載用の遺構写真を抽出し、画像処理ソフトウェアを用いて画像調整作業を行なった。これらの図面・写真と諸資料を基に執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウト・編集作業をDTPソフトウェアを用いて実施し、報告書を作成した。

註7. 外形および断面形を手実測、器面調整などの情報をデジタル写真実測により図化した。実測用に使用した写真は、中望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラを用いて撮影した画像を基に、ビットマップ画像編集ソフトウェアによりレンズ補正を加えて作成した擬似的な正射投影画像である。デジタル写真実測・トレースはベクトル画像編集ソフトウェアを用いて行なった。

註8. 現場で作成した図面をデジタル複合機のイメージスキャナを用いてデジタル画像化し、遺構調書を参照しながらベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。

第3章 調査の成果

第1節 微地形と基本層序

立地と微地形 本遺跡は円田盆地北部の標高 93～103m の低丘陵上に立地する。低丘陵は幅約 230m、長さ約 450m の舌状を呈し、南東方向に緩やかに傾斜する。明治 43 年の地形図では桑畑としての利用が確認できる（第 5 図）。遺跡の北西部は周辺の地形面と連続的であるが、南東部では南側と北東側を埋没谷地形で画され、南東側は低湿地となっている。調査地点は遺跡範囲の北西部に位置する。低丘陵の北東側を画する埋没谷地形の沢頭付近にあたり、標高約 100m で南東方向に向かって約 2.9% の勾配を持つ。調査前の現況は道路・畑地・山林である。

基本層序 調査区内の基本層序は 7 層に区分した（第 2 表）。

I 層：表土・耕作土層、II 層：黒ボク土層、III 層：漸移層、IV 層：ローム層、V 層：砂質ローム層、VI 層：蔵王川崎スコリア層（註 1）、VII 層：白色粘土層で、遺構確認面は IV 層上面である。

遺構確認面 調査区内の表土を除去した遺構確認面の微地形は現況とほぼ同じであったが、調査区東端で埋没谷地形の傾斜面を確認し、これより東側では I・II 層の堆積が厚くなる。

調査区西部では I 層の直下が IV・V 層の削平面となっており、畑地の造成や現道部分の路盤改良による影響が見られた。調査区西端では造成前の地形が部分的に残存しており、造成によって削平された高さは最大 120cm 程度と考えられた。遺構は IV 層上面、および IV・V 層の削平面で確認した。

第 2 表 基本層序一覧

層序	層名	土色	土質
I 層	表土・耕作土層	黒褐色	シルト
II 層	黒ボク土層	黒色	シルト
III 層	漸移層	暗褐色	シルト
IV 層	ローム層	褐色	シルト
V 層	砂質ローム層	褐色	砂質シルト
VI 層	蔵王川崎スコリア層	暗オリーブ灰色	シルト
VII 層	白色粘土層	灰黄褐色	砂質粘土

註 1. Za-Kw。蔵王火山を給源とするスコリア質テフラ。約 3 万年前の噴出とされている（板垣ほか 1981，長友ほか 2005）。

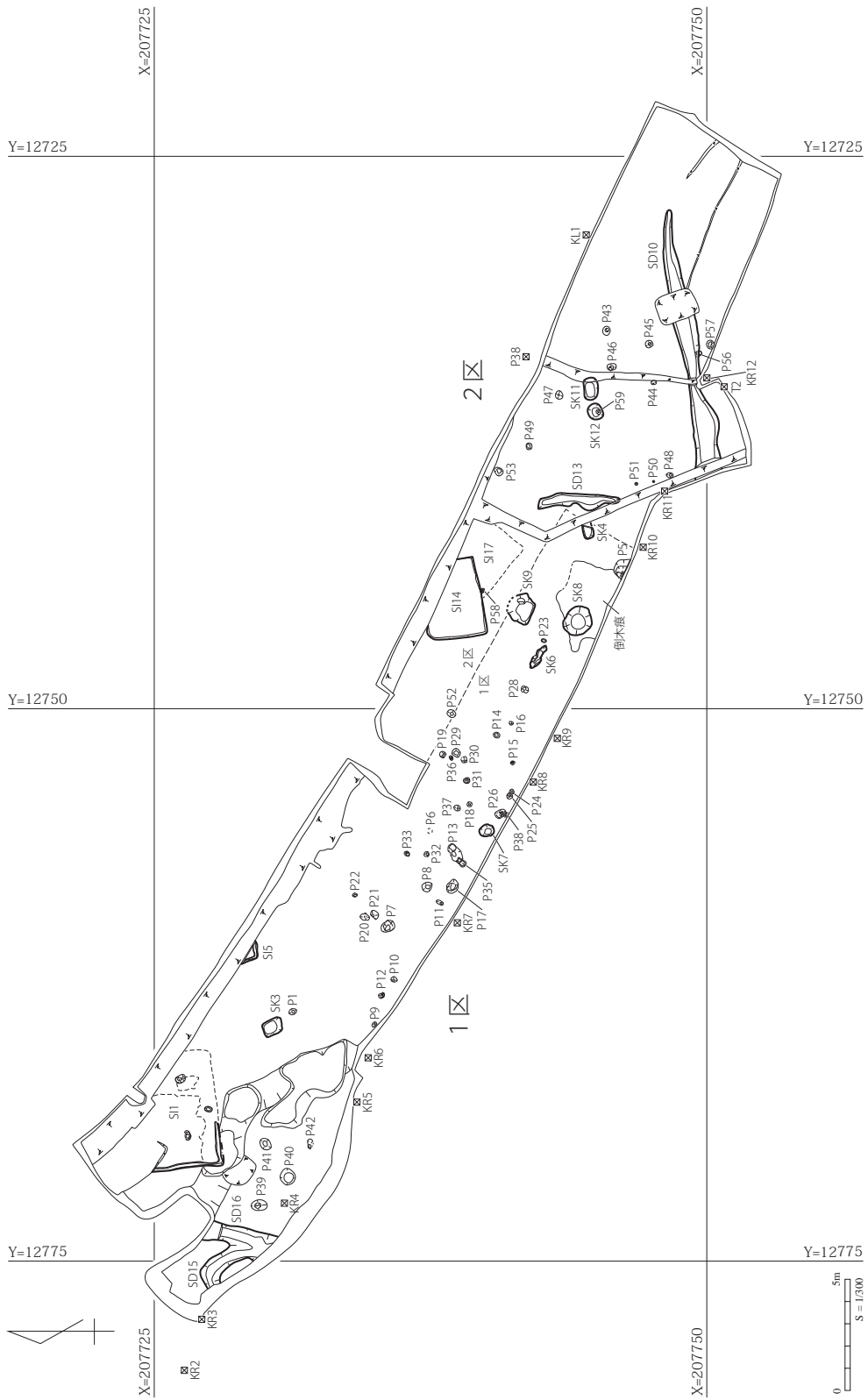
第2節 遺構と遺物の概要

確認状況 確認した遺構は、竪穴住居跡 4 軒、土坑 8 基、溝跡 4 条、柱穴 59 基の計 75 か所である（第 13 図）。調査区全域に散在し、遺構同士の重複は少ない。柱穴は建物跡などとして明確に組み合うものは確認できなかった。

遺物は竪穴住居跡、土坑、溝跡などから土師器 26 点、ロクロ土師器 3 点、須恵器 8 点、弥生土器 4 点、石器 4 点、礫石器 3 点、石製品 1 点、陶磁器 10 点、古銭 1 点の計 60 点（整理箱 1 箱分）が出土した。

帰属時期 出土遺物の多くを占めるのは土器・陶磁器類であるが、ほとんどが小片で製作時期や産地などを示す特徴が把握できるものは少ない。帰属時期が明らかなものとしては、土師器・須恵器には奈良時代・平安時代のものなどがあり、古銭は江戸時代末期、陶磁器は江戸時代末期～近代のものである。

遺構の特徴や出土遺物の年代などから機能時期が推定できるものとしては、奈良時代前半（8 世紀前半～中頃）の竪穴住居跡、中世以降の柱穴群、江戸時代末期～近代の土坑（土葬墓）・溝跡などがある。



第13図 調査区遺構配置図



1. 1区 (西から)



2. 1区 (東から)



3. 2区 (西から)



4. 2区 (東から)

写真1 調査区全景

第3節 検出遺構と出土遺物

A. 竪穴住居跡

【SI1 竪穴住居跡】(第14・15図, 写真2)

〔位置〕 調査区西部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 南半部のみ確認し、北側は調査区外へ延びている。平面形は長辺 5.27m、短辺 3.22m 以上の隅丸長方形とみられる。

〔方向〕 住居西辺：N-8° -W

〔壁面〕 地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大 48cm である。

〔床面〕 住居南西隅にのみ残存する。掘方埋土で構築され、ほぼ平坦である。

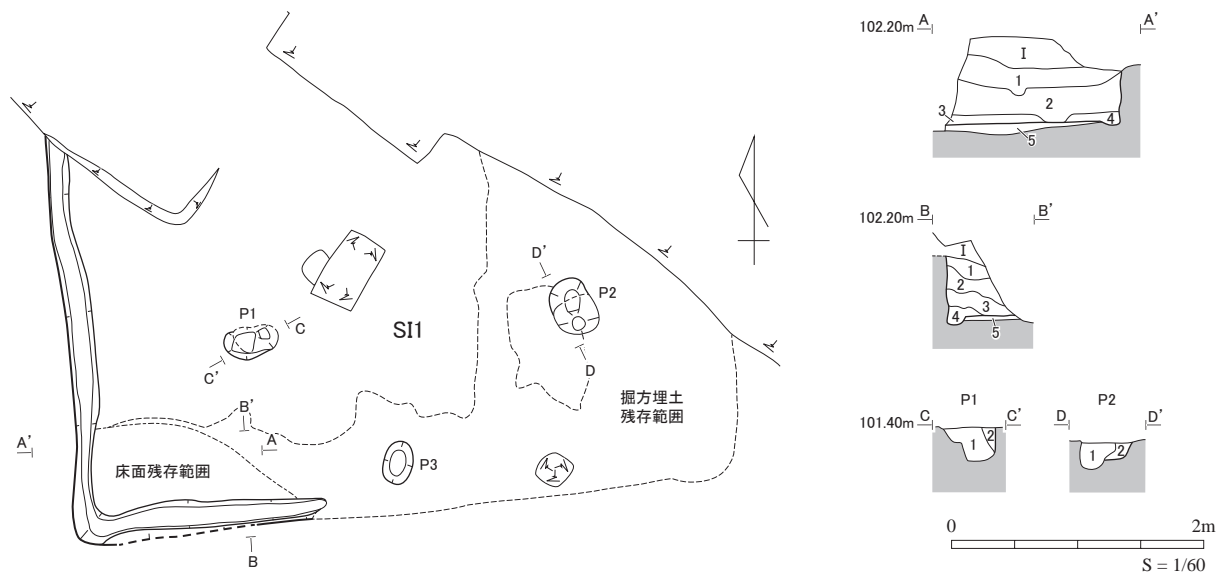
〔堆積土〕 床面を覆う堆積土は 4 層に細分され、いずれも自然堆積土である。

〔柱穴〕 住居南寄りで 3 か所 (P1 ~ 3) を確認した。P1・2 は住居対角線上に位置し、平面形が長軸 45 ~ 55cm、短軸 20 ~ 33cm の楕円形を呈し、深さ 21 ~ 26cm である。いずれも柱材抜き取り痕跡に壊されているため掘方の形状は不明である。

〔周溝〕 住居西辺および南辺の一部に沿って確認した。幅 7 ~ 22cm、深さ 5cm 程度で、堆積土は自然堆積土である。

〔焼焼施設〕 不明

〔貯蔵穴〕 不明



SI1 竪穴住居跡 A-A', B-B'

No.	土色	土性	含有物等
I	10YR2/3 黒褐	シルト	ローム粒：少量 / 焼土・炭化物粒：微量 (表土)
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム・黒褐色シルト粒含む / ロームブロック：少量 / 焼土・炭化物粒：微量 (住堆)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒含む / 焼土・炭化物粒, 炭化木片：少量 (住堆)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	ロームブロック・粒含む / 焼土ブロック・粒：少量 / 炭化物粒：微量 (住堆)
4	10YR3/3 暗褐	シルト	ローム粒含む / ロームブロック：少量 / 焼土・炭化物粒：微量 (住堆)
5	灰黄褐	シルト	ロームブロック・粒：多量 (住掘)

SI1 竪穴住居跡 P1 C-C'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック・粒：多量 (柱抜)
2	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック・粒：極めて多量 (柱掘)

SI1 竪穴住居跡 P2 D-D'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック・粒：極めて多量 (柱抜)
2	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック・粒：極めて多量 (柱掘)

第14図 SI1 竪穴住居跡



1. 確認状況（北から）



2. 床面検出状況（南西隅，北から）



3. 床面検出状況（北から）



4. P3 遺物出土状況（西から）



5. P1 半裁状況（北から）



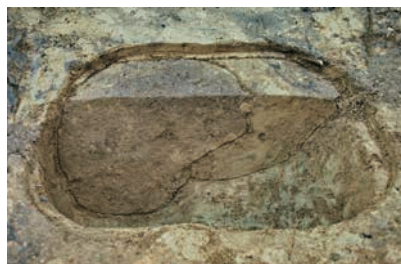
6. 断面（東から）



7. 断面（北から）



8. P1 断面（北から）

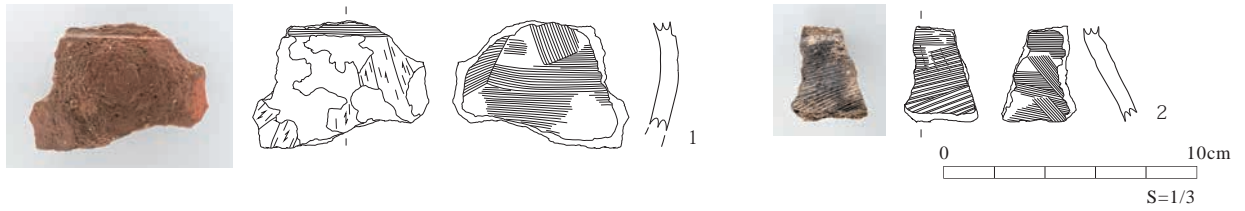


9. P2 断面（東から）



10. P3 断面（西から）

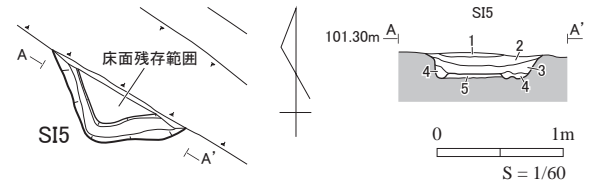
写真2 S11 竪穴住居跡



No	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量			残存	登録番号
						口径	底径	器高		
1	SI1	P3 堆積土	土師器	鉢	外面：(口) ヨコナデ、(体) ケズリ / 内面：(体) ヘラナデ	-	-	(5.0)	一部	1
2	SI1	堆積土	土師器	甕	外面：(頸) ヨコナデ、(胴) ハケメ / 内面：ナデ	-	-	(3.7)	一部	2

第15図 SI1 竪穴住居跡出土遺物

〔遺物〕 P3 柱穴堆積土から土師器鉢（第15図1）、住居内堆積土から土師器甕（第15図2）、礫片が出土した。土師器鉢：第15図1は外面口縁部と体部の境に弱い段を持ち、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整を施す。土師器甕：第15図2は外面胴部に横方向優勢のハケメ調整を施す。礫片：材質はデイサイトの垂円礫で、やや不明瞭な磨面が見られる。



SI5 竪穴住居跡 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒含む / ロームブロック：少量 / 焼土・炭化物粒：微量（住堆）
2	10YR4/4 褐	シルト	ローム粒含む / ロームブロック：少量 / 黒褐色シルトブロック：微量（住堆）
3	10YR4/4 褐	シルト	ローム粒含む / ロームブロック：少量 / 炭化物粒：微量（住堆）
4	10YR3/3 暗褐	シルト	ローム粒含む / ロームブロック：微量（周溝内堆）
5	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒含む / ロームブロック：少量（住堆）

第16図 SI5 竪穴住居跡

〔SI5 竪穴住居跡〕（第16図、写真3）

〔位置〕 調査区西部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 南西隅のみ確認し、大部分は調査区外へ延びている。平面形は長辺0.80m以上、短辺0.77m以上の隅丸方形とみられる。

〔方向〕 住居東辺：N-22° -W

〔壁面〕 地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大17cmである。

〔床面〕 掘方埋土で構築され、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 床面を覆う堆積土は4層に細分され、いずれも自然堆積土である。

〔柱穴〕 不明

〔周溝〕 住居西辺および南辺に沿って確認した。幅11～21cm、深さ4cm程度で、堆積土は自然堆積土である。

〔燃焼施設〕 不明

〔貯蔵穴〕 不明

〔遺物〕 なし

〔SI14a・b 竪穴住居跡〕（第17・18図、写真4）

〔位置〕 調査区中央部

〔重複〕 SI17 → SI14a → SI14b

〔規模・形状〕 北東隅が調査区外へ延びている。平面形は長辺3.52m、短辺2.68mの隅丸方形とみられる。

〔方向〕 住居西辺：N-8° -W



1. 床面検出状況（南西から）



2. 断面（南西から）

写真3 SI5 竪穴住居跡

第3章 調査の成果

〔壁面〕地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は床面 a から最大 20cm、床面 b から最大 18cm である。

〔床面〕2 時期の床面を確認した。床面 a は掘方埋土で構築され、ほぼ平坦である。中央南寄りの長軸 1.50m、短軸 1.10m の範囲で床面の硬化を確認した。床面 b は床面 a の上に掘方埋土を嵩上げて構築され、ほぼ平坦である。中央部の長軸 2.35m、短軸 1.82m 以上の範囲で床面の硬化を確認した。

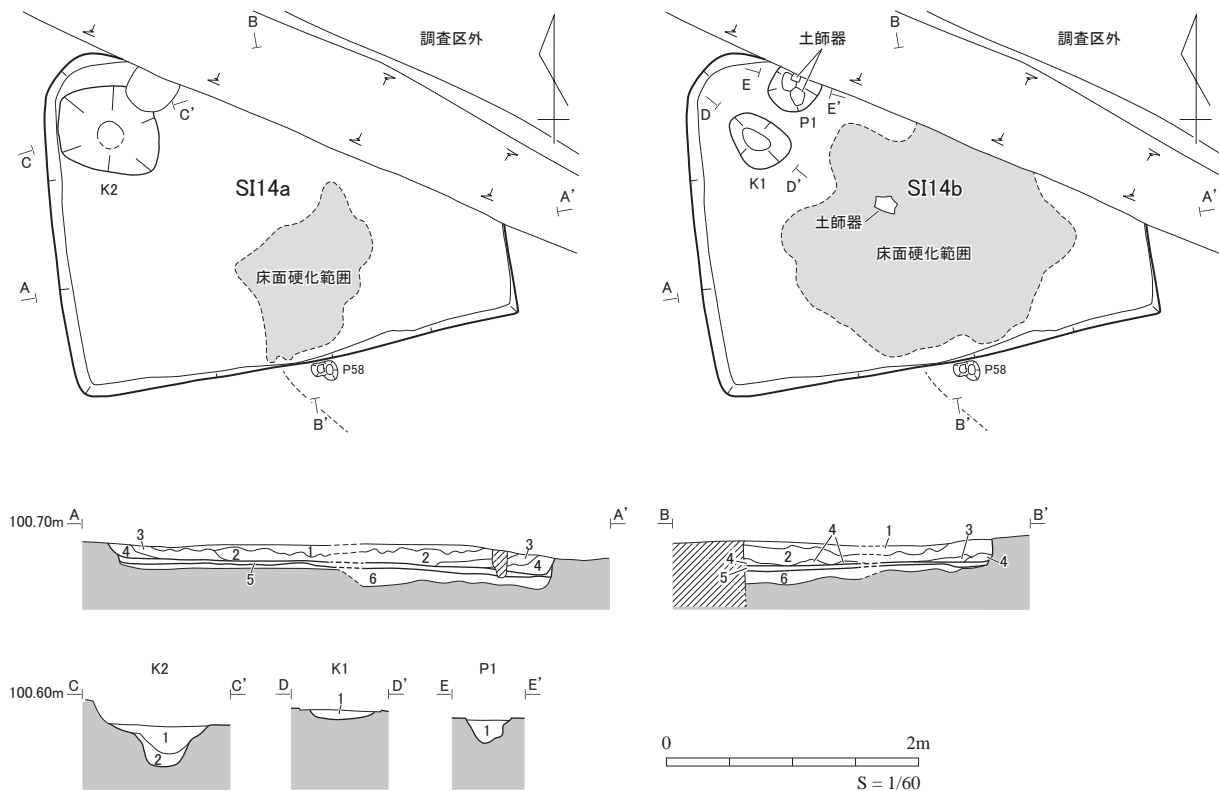
〔堆積土〕床面 b を覆う堆積土は 4 層に細分され、いずれも自然堆積土である。

〔柱穴〕住居北西隅付近で床面 b に伴う柱穴 1 基 (P1) を確認した。また、住居南辺中央外側に接して確認した柱穴 1 基 (P58) については床面との関係は不明であるが、本住居跡に伴う可能性がある。P1 は平面形が長軸 38cm、短軸 28cm 以上の略円形を呈し、深さ 28cm である。P58 は平面形が長軸 20cm、短軸 15cm の不整楕円形を呈し、深さ 20cm である。いずれも柱材抜き取り痕跡に壊されているため掘方の形状は不明である。

〔周溝〕なし

〔焼焼施設〕なし

〔貯蔵穴〕住居北西隅で床面 a に伴う土坑 1 基 (K2)、床面 b に伴う土坑 1 基 (K1)



SI14 竪穴住居跡 A-A', B-B'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック・粒:少量 / 焼土・炭化物粒:微量 (住掘)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック・粒:多量 / 焼土粒:少量 / 炭化物粒:微量 (住掘)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒:多量 / ロームブロック:少量 / 炭化物粒:微量 (住掘)
4	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒:多量 (壁崩)
5	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒含む / 黒色シルトブロック:多量 (b 期床面, 住掘)
6	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック・粒:極めて多量 / 黒色シルトブロック:多量 (a 期床面, 住掘)

SI14 竪穴住居跡 K2 C-C'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック・粒:多量 / 黒色シルトブロック:少量 / 焼土・炭化物粒:微量
2	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック・粒:極めて多量

SI14 竪穴住居跡 K1 D-D'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/3 暗褐	シルト	ロームブロック含む / 焼土・炭化物粒:少量

SI14 竪穴住居跡 P1 E-E'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック, 焼土ブロック・粒含む / 炭化物粒:少量

第 17 図 SI14 竪穴住居跡



1. 確認状況（南から）



2. 床面検出状況（a期：下層，南から）



3. 床面検出状況（b期：上層，南から）



4. 床面遺物出土状況（北西から）



5. 作業風景（南から）



6. P1 断面（南西から）



7. P1 遺物出土状況（北東から）



8. 床面検出作業風景（南東から）



9. K1 断面（南西から）



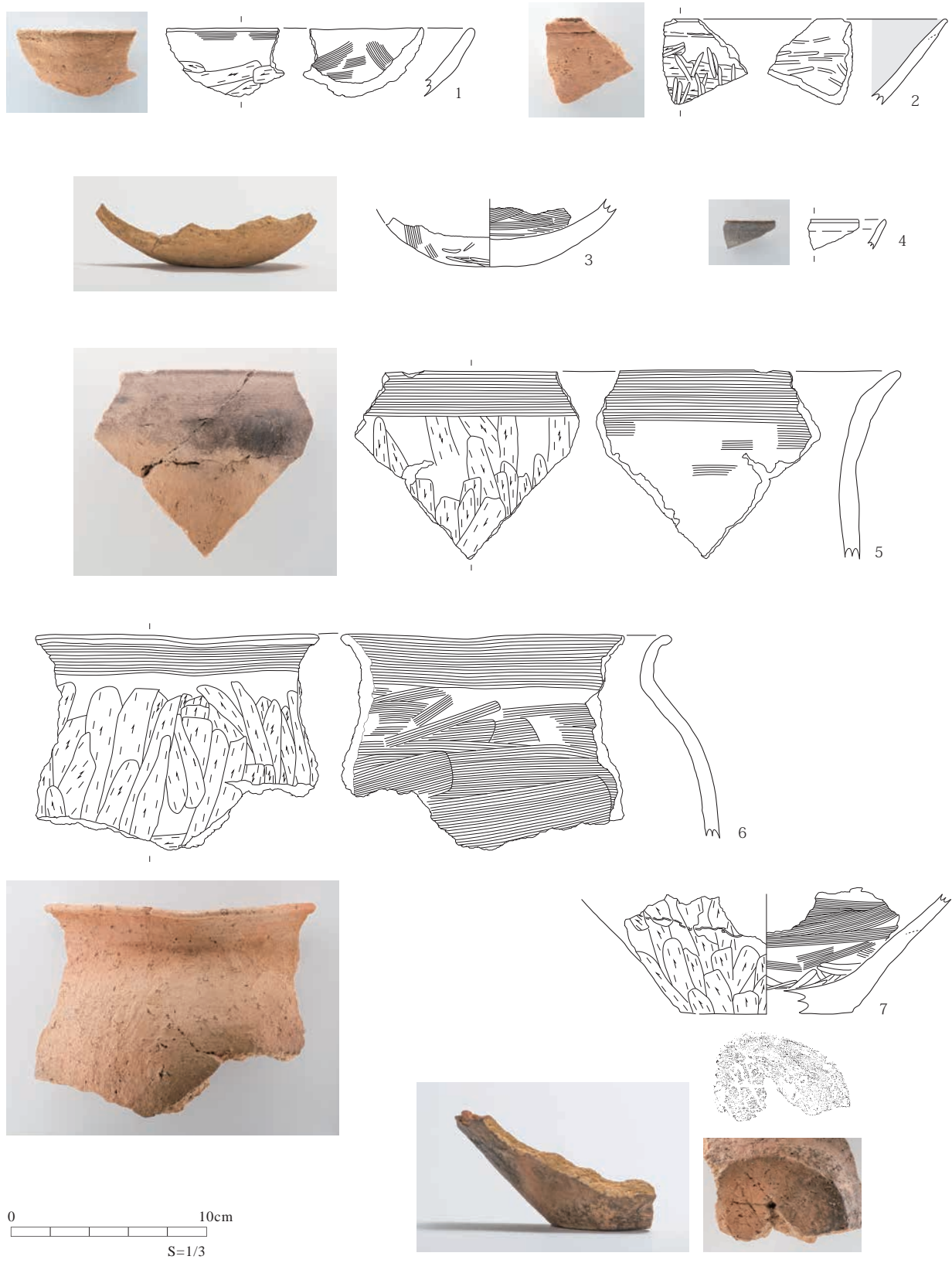
10. K2 断面（南から）



11. K2 完掘状況（南から）

写真4 SI14 竪穴住居跡

第3章 調査の成果



No	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量			残存	登録番号
						口径	底径	器高		
1	SI14	P1 確認面	土師器	坏	外面：(口) ヨコナデ、(体) ケズリ / 内面：ナデ	-	-	(3.5)	一部	3
2	SI14	堆積土	土師器	坏	外面：ヨコナデ→(体下) ヘラケズリ→粗いミガキ / 内面：ミガキ→黒色処理	-	-	(4.4)	一部	4
3	SI14	P1 堆積土下層	土師器	坏	外面：(底) ナデ→粗いミガキ / 内面：(底) ナデ	-	-	(3.5)	一部	5
4	SI14	確認面	須恵器	坏	内外面：(口) ロクロナデ	-	-	(1.5)	一部	9
5	SI14	堆積土	土師器	甗	外面：(口) ヨコナデ、(胴) ヘラケズリ / 内面：(口) ヨコナデ、(胴) ナデ	-	-	(9.7)	一部	6
6	SI14	床面直上	土師器	甗	外面：(口) ヨコナデ、(胴) ナデ→ヘラケズリ / 内面：(口) ヨコナデ、(胴) ナデ	-	-	(10.4)	一部	7
7	SI14	P1 堆積土下層	土師器	甗	外面：(胴) ケズリ、(底) 木葉痕・ケズリ / 内面：(胴) ヘラナデ、(底) 粗いミガキ	-	(8.8)	(6.2)	一部	8

第18図 SI14 竪穴住居跡出土遺物

を確認した。位置・形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。K2は平面形が長軸77cm、短軸69cmの不整楕円形を呈し、深さ32cmである。堆積土は2層に細分され、いずれも人為的埋土である。K1は平面形が長軸50cm、短軸36cmの楕円形を呈し、深さ12cmである。堆積土は1層で、自然堆積土である。〔遺物〕P1柱穴から土師器坏(第18図1・3)・甕(第18図7)、床面直上から土師器甕(第18図6)、住居内堆積土から土師器坏(第18図2)・甕(第18図5)、確認面から須恵器坏(第18図4)が出土した。土師器坏：第18図1は外面口縁部と体部の境に痕跡的な段を持ち、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整を施す。第18図2は外面体部にヘラケズリ調整の後、内外面に粗いミガキ調整を施し、内面黒色処理仕上げである。第18図3は丸底風平底で、外面底部に粗いミガキ調整を施す。須恵器坏：第18図4は内外面の口縁部にロクロナデ調整を施す。土師器甕：第18図5は胴部上半が直立気味で、頸部から口縁部にかけて外反する。外面の体部に縦方向優勢のヘラケズリ調整、内外面の口縁部にヨコナデ調整を施す。第18図6は胴部上半が丸みを持ち、直立する頸部から口縁部が外反する。外面胴部に縦方向優勢のヘラケズリ調整、内外面の口縁部にヨコナデ調整を施す。第18図7は外面の胴部下半に縦方向優勢のヘラケズリ調整、内面底部に粗いヘラミガキ調整を施す。外底面に木葉痕を残す。

〔SI17 竪穴住居跡〕(第19図, 写真5)

〔位置〕調査区中央部

〔重複〕SI17 → SI14a → SI14b

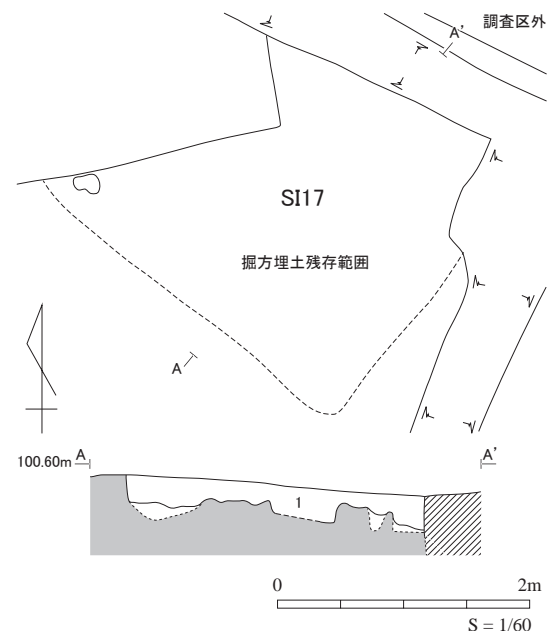
〔規模・形状〕北西側がSI14a・b竪穴住居跡に、北東側は攪乱によって壊されている。平面形は長辺2.97m以上、短辺1.72m以上の隅丸方形とみられる。

〔方向〕住居東辺：N-38.5°-E

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない

〔柱穴・周溝・燃烧施設・貯蔵穴〕不明

〔遺物〕なし



SI17 竪穴住居跡 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック含む / ローム粒：少量 / 黒色シルトブロック (住掘)

第19図 SI17 竪穴住居跡

B. 土坑

〔SK3 土坑〕(第20図, 写真6)

〔位置〕調査区西部

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸0.92m、短軸0.68mの隅丸方形で、断面形は深さ0.14mの逆台形を呈する。

〔堆積土〕ロームブロックを含む暗褐色シルトである。

〔遺物〕なし

〔SK4 土坑〕(第20図, 写真6)

〔位置〕調査区東部

〔重複〕なし



写真5 SI17 竪穴住居跡 (南西から)

第3章 調査の成果

〔規模・形状〕 東側が攪乱を受けている。平面形は長軸 0.64m、短軸 0.45m の楕円形で、短軸方向の断面形は深さ 0.17m の不整V字形を呈する。

〔堆積土〕 多量のローム粒と少量の炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

〔遺物〕 なし

【SK6 土坑】 (第20図, 写真6)

〔位置〕 調査区中央部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 1.20m、短軸 0.39m の溝状で、短軸方向の断面形は深さ 0.57m の不整U字形を呈する。

〔堆積土〕 3層に細分され、1層は暗褐色シルト、2層はロームブロックを多く含む褐色シルト、3層はロームブロック主体である。

〔遺物〕 なし

【SK7 土坑】 (第20図, 写真6)

〔位置〕 調査区中央部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 0.66m、短軸 0.53m の不整形円で、断面形は深さ 0.22m の楕形を呈する。

〔堆積土〕 2層に細分され、1層は暗褐色シルト、2層はロームブロックを多く含む褐色シルトである。

〔遺物〕 なし

【SK8 土坑】 (第20・21図, 写真6)

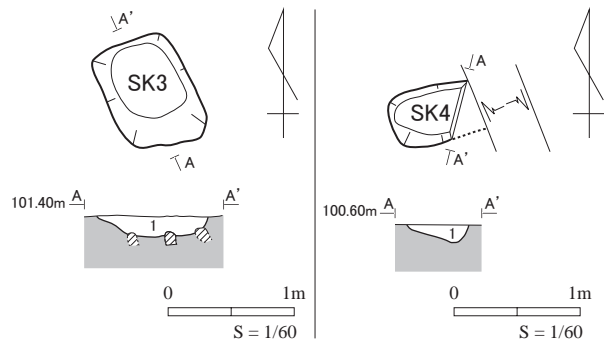
〔位置〕 調査区中央部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 1.4m、短軸 1.2m の不整形円で、断面形は深さ 0.55m の不整逆台形を呈する。

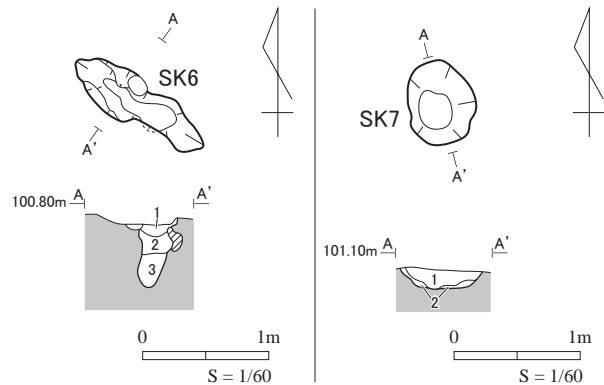
〔堆積土〕 5層に細分され、1層は黒褐色シルト、2層はロームブロックを多く含む暗褐色シルト、3層は黒褐色シルト、4層は黒褐色シルト、5層はロームブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。堆積状況と含有物等から5層は人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕 堆積土から陶器筒形碗(第21図3)・硯(第21図5)・火打石(第21図4)・ロクロ土師器坏(第21図2)・弥生土器(第21図1)・木炭片が出土した。硯は堆積土上層、火打石は下層から出土し、陶器碗は上層・下層で出土したものが接合している。陶器筒形碗：第21図3は内外面に鉄釉を施す。硯：第21図5は硬質粘板岩製



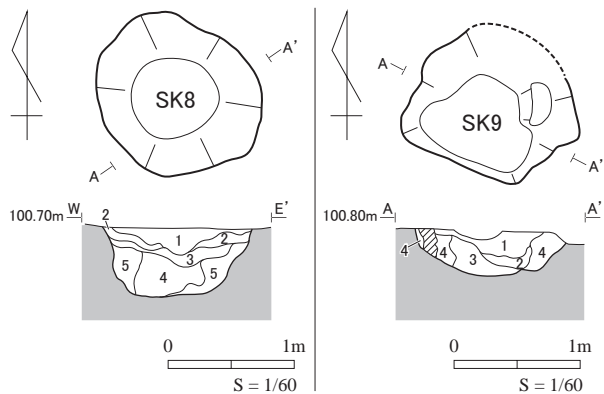
SK3 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	ロームブロック・粒：多量

SK4 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	ロームブロック・粒：多量



SK6 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	ローム粒：少量
2	10YR4/4 褐色	シルト	ロームブロック：多量 (崩)
3	10YR4/6 褐色	シルト	ロームブロック：主体 (崩)

SK7 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	ロームブロック・粒：微量
2	10YR4/4 褐色	シルト	ロームブロック：多量 / ローム粒：微量



SK8 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	ロームブロック：少量
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	ロームブロック・粒：多量
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	ロームブロック・粒：少量
4	10YR3/1 黒褐色	シルト	ロームブロック・粒：少量 (人為)
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	ロームブロック・粒：多量

SK9 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR4/4 褐色	シルト	ロームブロック含む / ローム粒：少量 / 炭化物粒：微量
2	10YR4/6 褐色	シルト	ロームブロック含む
3	10YR4/7 褐色	シルト	ロームブロック・粒
4	10YR4/8 褐色	シルト	ロームブロック：多量

第20図 SK3・4・6・7・8・9土坑

で底面と側面の一部のみ残存する。火打石：第21図4は玉髓製で上面の縁辺などに潰れと小剥離が見られる。ロクロ土師器坏：第21図2は外面口縁部にロクロナデ調整、内面にヘラミガキ調整を施し、黒色処理仕上げである。弥生土器：第21図1は外面に縄文を施文する。

【SK9 土坑】(第20図, 写真6)

〔位置〕 調査区中央部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 1.35m、短軸 1.15mの不整円形で、断面形は深さ 0.35mの椀形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分される。いずれも褐色シルトで、4層はロームブロックを多く含む。堆積状況と含有物等から4層は人為的埋土と考えられる。

〔遺物〕 なし

【SK11 土坑】(第22図, 写真7)

〔位置〕 調査区東部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 0.98m、短軸 0.64mの楕円形で、断面形は深さ 0.42mの椀形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。いずれも黒褐色シルトで、1層はローム粒、3層はロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 なし

【SK12 土坑】(第22図, 写真7)

〔位置〕 調査区東部

〔重複〕 SK12 → P59

〔規模・形状〕 平面形は長軸 0.77m、短軸 0.67mの略円形で、断面形は深さ 0.41mの楕鉢形を呈する。



1. SK3 土坑断面 (東から)



2. SK4 土坑断面 (西から)



3. SK6 土坑完掘状況・断面 (西から)



4. SK7 土坑断面 (西から)



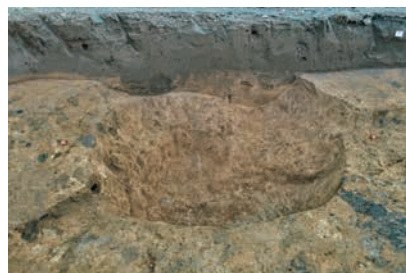
5. SK8 土坑完掘状況 (東から)



6. SK8 土坑断面 (南東から)



7. SK8 土坑作業風景 (北東から)



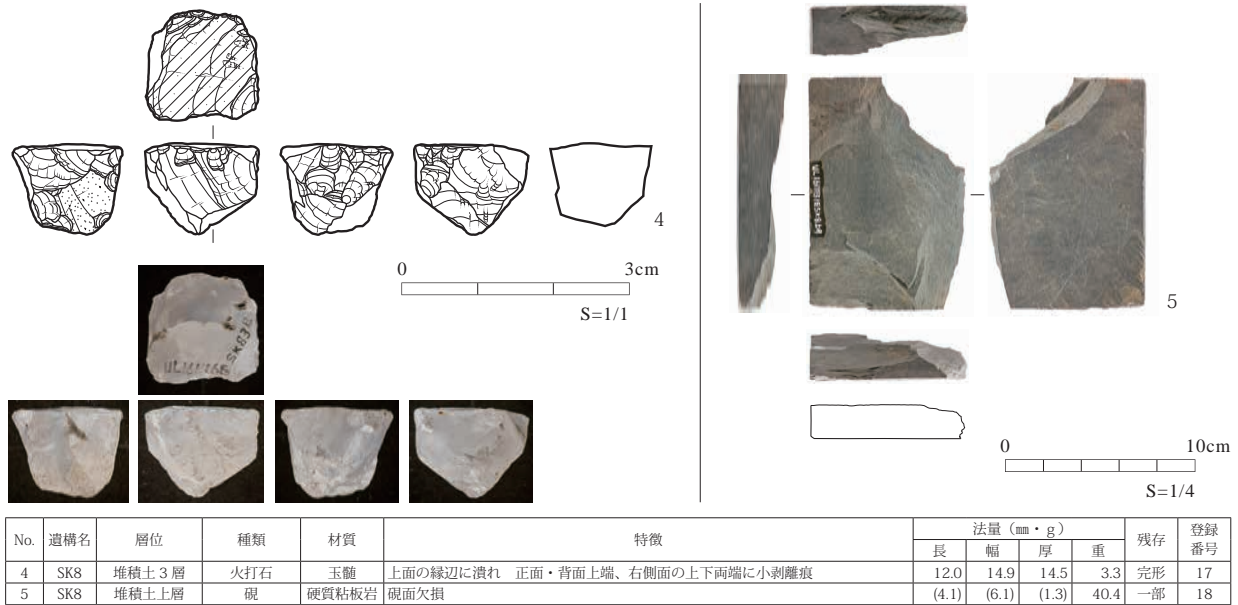
8. SK9 土坑完掘状況 (南西から)



9. SK9 土坑断面 (南西から)

写真6 SK3・4・6・7・8・9土坑

第3章 調査の成果



第21図 SK8 土坑出土遺物

〔堆積土〕2層に細分され、いずれも黒褐色シルトである。

〔遺物〕なし

C. 溝跡

【SD10 溝跡】(第23図, 写真8)

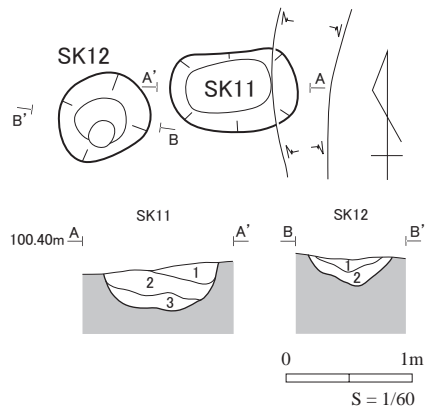
〔位置〕調査区東部

〔重複〕P56 → SD10

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延び、底面は微地形に沿って東へ向かって傾斜している。延長12.12mを確認した。西側は調査区外へ延びており、東端は斜面部で途切れる。上幅1.15m、底幅0.80mで、横断面形は深さ0.27mのU字形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分される。いずれも黒褐色シルトで、2層は少量の炭化物粒、4層は多量のロームブロックを含む。

〔遺物〕堆積土から土師器甕、須恵器甕、石核、礫片が出土した。土師器甕は口縁部の内面にヨコナデ調整を施す。須恵器甕は外面に平行タタキ目が見られる。石核は流紋岩製で自然面を打面として小型の剥片を剥離する。礫片は蛇紋岩・砂岩で、砂岩のものは平滑な磨面が見られる。



1. SK11 土坑断面（北から）

2. SK12 土坑断面（北から）



3. SK11・12 土坑完掘状況（北から）

SK11 土坑 A-A'

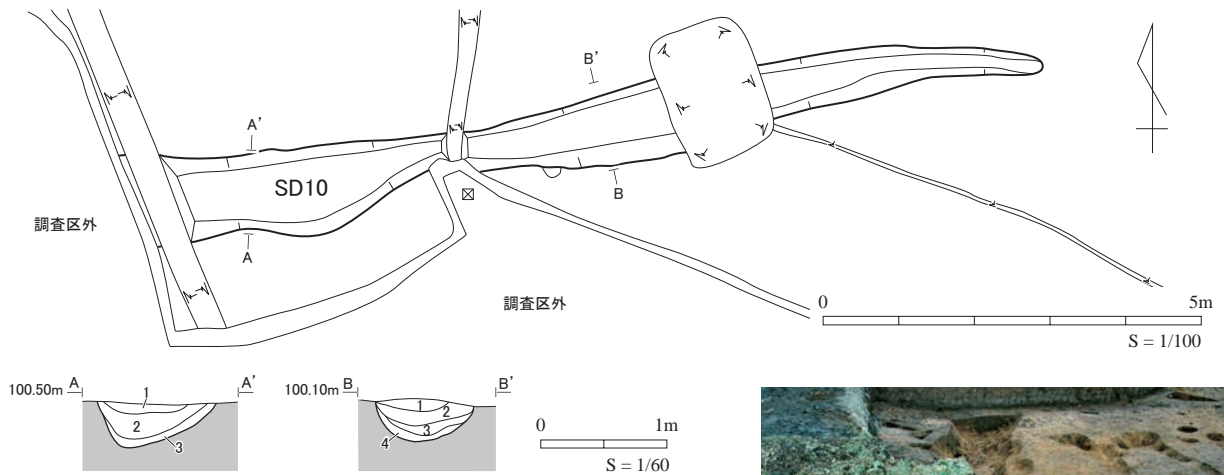
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ローム粒：少量
2	10YR2/2 黒褐	シルト	ロームブロック・粒：少量
3	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック：多量

SK12 土坑 B-B'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ローム粒：少量
2	10YR2/2 黒褐	シルト	ロームブロック・粒

第22図 SK11・12 土坑

写真7 SK11・12 土坑



SD10 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック・粒：微量
2	10YR2/2 黒褐	シルト	ローム粒：多量／ロームブロック：微量
3	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒：多量

SD10 溝跡 B-B'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック：少量
2	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック含む／炭化物粒：少量
3	10YR2/2 黒褐	シルト	ロームブロック含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	ロームブロック：多量

第23図 SD10 溝跡



1. 断面 (A-A', 東から)

2. 断面 (B-B', 東から)



3. 完掘状況（東から）

写真8 SD10 溝跡

【SD13 溝跡】(第24・25図, 写真10)

〔位置〕 調査区東部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 南北方向に直線的に延び、底面はほぼ平坦である。延長3.68mで、上幅0.73m、底幅0.38m、横断面形は深さ0.26mの皿形を呈する。

〔堆積土〕 2層に細分される。いずれも暗褐色シルトで、1層は少量の炭化木片、2層は多量のロームブロックを含む。

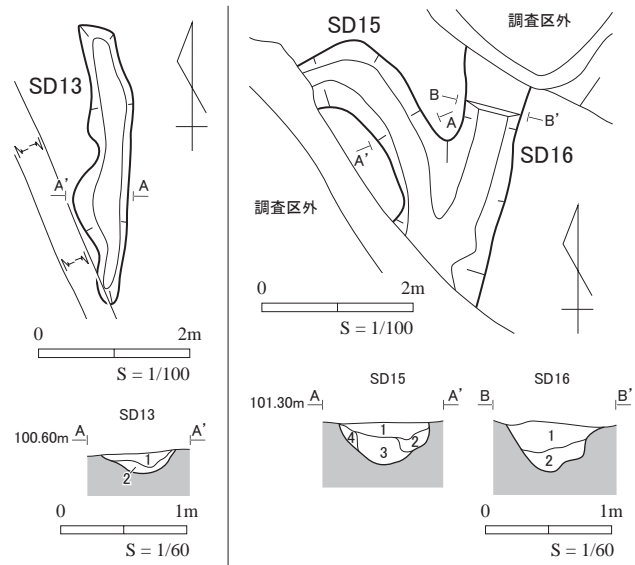
〔遺物〕 堆積土から寛永通宝(第23図)が出土した。銅製の十一波四文銭で1857年(江戸・深川東大工町)の鋳造である。

【SD15・16 溝跡】(第25図, 写真9・10)

〔位置〕 調査区西部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 南北方向に直線的に延びる溝跡(SD16)と、SD16 溝跡の南端から西側へ分岐して弧状に延びる溝跡(SD15)を確認した。底面は南側の分岐点へ向かってわずかに傾斜している。SD16 溝跡は延長3.38mを確認し、両端が調査区外へ延びている。上幅0.88m、底幅0.82mで、横断面形は深さ

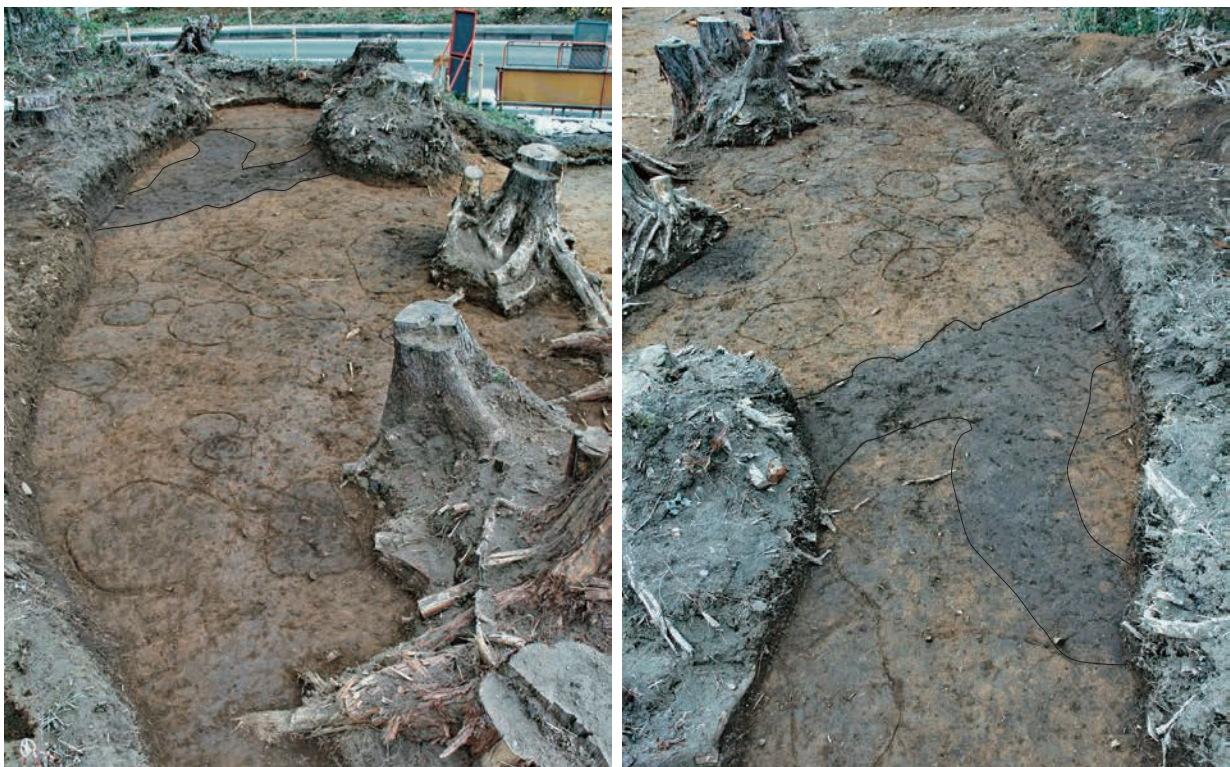


SD13 溝跡 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒：多量 / 炭化木片・粒：少量
2	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック：多量

SD15 溝跡 A-A'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/2 黒褐	シルト	ロームブロック・粒：微量
2	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：多量
3	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック・粒：微量
4	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム・黒褐色シルトブロック含む

SD16 溝跡 B-B'			
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/2 黒褐	シルト	ロームブロック・粒：少量
2	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック含む

第24図 SD13・15・16 溝跡



1. 1区西端部(東から)

2. 1区西端部(西から)

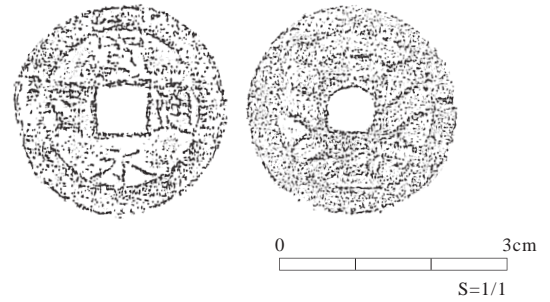
写真9 遺構確認状況

0.36mのU字形を呈する。SD15溝跡はSD16溝跡との分岐点から延長3.02mを確認し、西側が調査区外へ延びている。上幅1.28m、底幅0.49mで、横断面形は深さ0.39mのU字形を呈する。

〔堆積土〕SD15溝跡では4層に細分され、1・3層は黒褐色シルト、2層はロームブロックを多く含む褐色シルト、4層は暗褐色シルトである。SD16溝跡では2層に細分され、いずれも黒褐色シルトである。SD15-1層とSD16-1層、SD15-3層とSD16-2層がそれぞれ対応する。〔遺物〕なし

D. 柱穴 (第26・27図, 写真11)

59基を確認した。調査区中央部のほか、西端部と東部の落ち際にややまとまって分布するが、建物跡などとして明確に組み合わせるものは確認できなかった。柱穴掘方の規模は長軸20～90cm程度で、30～40cm程度のものが主体である。平面形は略円形・楕円形で、斉性はあまり見られない。10基で柱材の抜き取り痕跡を確



No.	遺構名	層位	種類	材質	法量 (mm・g)				残存	登録番号
					長	幅	厚	重		
1	SD13	堆積土	古銭	銅	28.1	28.1	1.5	5.3	完形	19
特徴 銭銘：寛永通宝 銭種：十一波四文銭 鋳造：江戸・深川東大工町 (1857)										

第25図 SD13 溝跡出土遺物



1. SD13 溝跡 (北から)



2. SD15・16 溝跡 (西から)



3. SD13 溝跡断面 (北から)



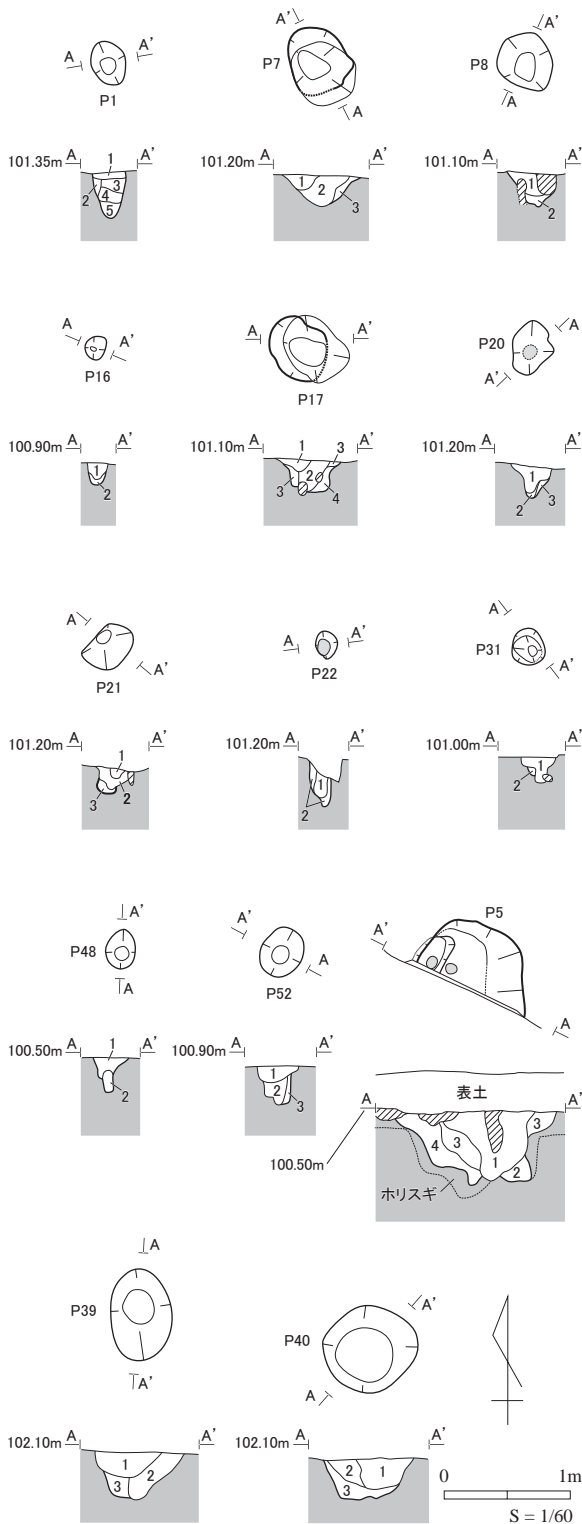
4. SD15 溝跡断面 (北西から)



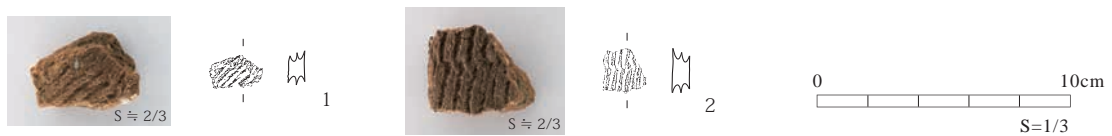
5. SD16 溝跡断面 (南から)

写真10 SD13・15・16 溝跡

第3章 調査の成果



第26図 組み合わない柱穴



No	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量			残存	登録番号
						口径	底径	器高		
1	P29	堆積土	弥生土器	-	外面：縄文 (RI) 内面：ミガキ 胎土：無色鉱物含有 器厚：0.7cm	-	-	-	一部	15
2	P29	堆積土	弥生土器	-	外面：縄文 (RI) 内面：ミガキ 胎土：無色鉱物含有 黒雲母含有 器厚：0.7cm	-	-	-	一部	16

第27図 組み合わない柱穴出土遺物

P1 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック・粒：多量
2	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：極めて多量
3	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：極めて多量
4	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：多量
5	10YR4/6 褐	シルト	ローム粒：多量

P5 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ローム粒：多量 / ロームブロック含む / 炭化物粒：微量 (柱抜)
2	10YR3/3 暗褐	シルト	ローム粒：極めて多量 / ロームブロック含む (柱痕)
3	10YR3/2 黒褐	シルト	ローム粒：多量 / ロームブロック含む (柱掘)
4	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：極めて多量 / ロームブロック含む (柱掘)

P7 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：少量 (柱抜)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒, 黒褐色シルトブロック：少量 (柱抜)
3	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック・粒：少量 (柱掘)

P8 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：少量
2	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：極めて多量

P16 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒：少量 (柱抜)
2	10YR5/6 黄褐	シルト	ローム粒：多量 (柱掘)

P17 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：微量 (柱抜)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：多量 (柱抜)
3	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック・粒：多量 (柱掘)
4	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：極めて多量 (柱掘)

P20 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒：少量 (柱抜)
2	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック・粒：主体 (柱痕)
3	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：極めて多量 (柱掘)

P21 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：少量 (柱抜)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：少量 (柱抜)
3	10YR4/4 褐	シルト	ロームブロック：極めて多量 (柱掘)

P22 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒：少量 (柱痕)
2	10YR4/6 褐	シルト	ローム粒：主体 (柱掘)

P31 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR4/6 褐	シルト	ローム粒：多量 / ローム・暗褐色シルトブロック含む (柱抜)
2	10YR4/4 褐	シルト	ローム粒：極めて多量 (柱掘)

P39 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ローム粒, 黒色シルトブロック：微量
2	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック：少量 / ローム粒, 黒色シルトブロック：微量
3	10YR4/6 褐	シルト	ロームブロック：多量 / 黒色シルトブロック：微量

P40 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/3 暗褐	シルト	ロームブロック含む / ローム粒：少量 / 炭化物粒：微量
2	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック含む / ローム・炭化物粒：微量
3	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック含む / 炭化物粒：微量

P48 柱穴 A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/3 暗褐	シルト	ロームブロック・粒含む (柱抜)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	ローム粒：少量 (柱痕)

P52 柱穴 A-A'

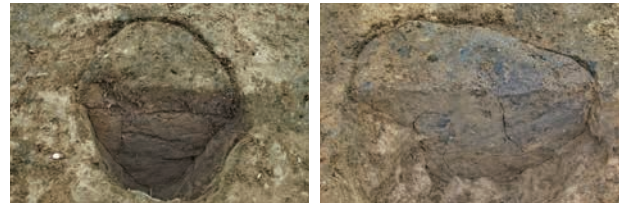
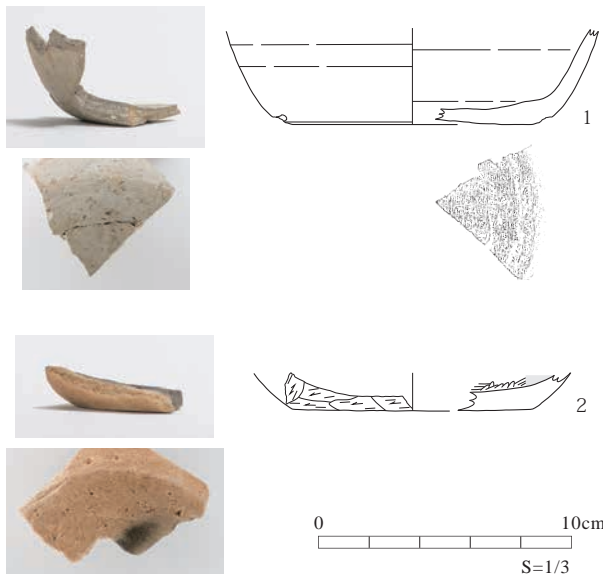
No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/4 暗褐	シルト	ロームブロック・粒含む / 黒褐色シルトブロック：少量
2	10YR3/2 黒褐	シルト	ロームブロック・粒含む

認した。柱痕跡を確認したものは4基で、平面形が8～10cmの円形を呈する。遺物はP29柱穴堆積土から弥生土器(第27図1・2)が出土した。外面に縄文を施文し、内面にミガキ調整を施す。

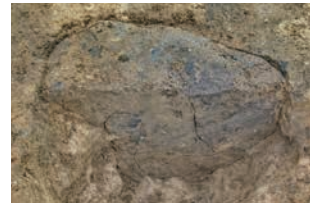
E. 遺構外出土遺物 (第28図)

遺構確認面から土師器甕、剥片、表土から須恵器环(第28図1)、ロクロ土師器环(第28図2)、土師器环、石核、陶器碗・甕、磁器碗・猪口などが出土した。

須恵器环：第28図1は底径が大きく体部が内穹気味に立ち上がる。内外面ロクロナデ調整を施し、外底面に回転ヘラ切り痕を残す。ロクロ土師器环：第28図2は外面体部下半と外底面に手持ちヘラケズリ調整、内面にヘラミガキ調整を施し、黒色処理仕上げである。土師器环：内面に黒色処理を施す。土師器甕：胴部外面にハケメ調整を施す。陶器碗：内外面に灰釉を施す。陶器甕：内面に長石釉、外面に鉄釉を施し、外底面に回転糸切痕を残す。磁器碗：外面に蔓草文・圏線を施文する。磁器猪口：外面に植物文・圏線を施文する。石核：灰白色の石材で自然面を打面として小形の剥片を剥離する。剥片：珪質シルト岩製で小型のものである。



1. P1 柱穴断面 (南から)



4. P8 柱穴断面 (南東から)



2. P5 柱穴断面 (北東から)



3. P7 柱穴断面 (北東から)



5. P16 柱穴断面 (南西から)



6. P17 柱穴断面 (南から)



7. P20 柱穴断面 (北西から)



8. P21 柱穴断面 (南西から)



9. P22 柱穴断面 (南から)



10. P31 柱穴断面 (南西から)



11. P39 柱穴断面 (西から)



12. P40 柱穴断面 (南東から)



13. P48 柱穴断面 (東から)



14. P52 柱穴断面 (北東から)

写真11 組み合わない柱穴

No	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量			残存	登録番号
						口径	底径	器高		
1	-	表土	須恵器	环	外面：(体) ロクロナデ、(底) 回転ヘラ切り→ナデ / 内面：ロクロナデ	-	(10.0)	(3.8)	一部	10
2	-	表土	ロクロ土師器	环	外面：(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 手持ちヘラケズリ、切離不明 / 内面：ミガキ→黒色処理	-	(9.6)	(1.5)	一部	11

第28図 遺構外出土遺物

第4節 遺構と遺物の特徴

竪穴住居跡 4軒（SI1・5・14・17）を確認した。調査区中央～西部の平坦面に分布する。いずれも平面形は隅丸方形で、方位は真北を基準にしてSI1・14竪穴住居跡が8°西偏、SI5竪穴住居跡が22°西偏、SI17竪穴住居跡が38.5°東偏する。SI1竪穴住居跡は大部分が現道の削平を受けており、南西隅周辺のみ壁面・床面・周溝が残存していた。SI5竪穴住居跡は大部分が調査区外に位置し、南西隅周辺のみ壁面・床面を確認した。SI14竪穴住居跡は全体の4分の3ほどが調査区内にあり、壁面・床面を確認した。北東隅周辺が調査区外に位置する。SI17竪穴住居跡は現道の削平を受けており、床面・壁面が残存しない。また、北西隅周辺をSI14竪穴住居跡に壊されている。以上のとおり、全体の規模や構造が明らかになったものはない。また、炉跡やカマドなどの燃焼施設についても不明である。

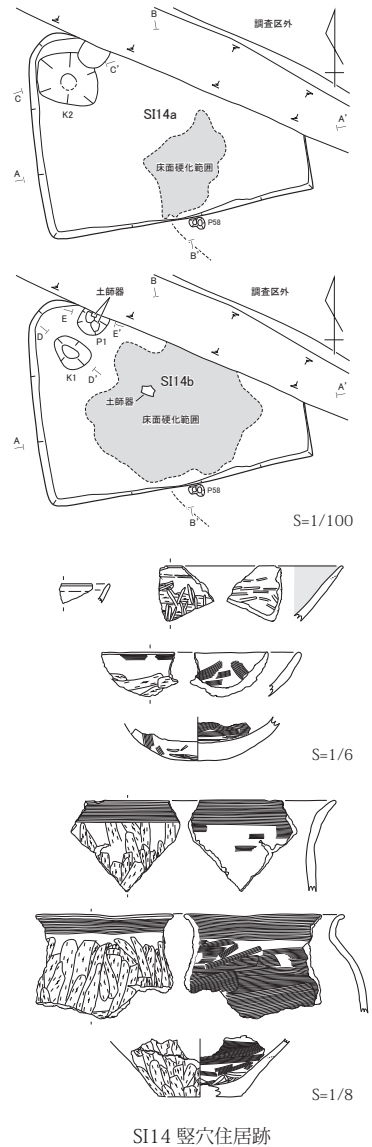
遺物はSI1竪穴住居跡で土師器鉢・甕、SI14竪穴住居跡で土師器杯・甕、須恵器杯が出土した。SI14竪穴住居跡出土遺物は、内面黒色処理仕上げの土師器杯のほか、器壁が厚く内面ナデ仕上げで黒色処理を施さない杯、頸部に段を持たず外面の胴部に縦方向優勢のケズリ調整を施す甕などを組成する。これらは8世紀前半～中頃の周辺遺跡（鈴木2016, 註2）に類例が見られる。

これらの竪穴住居跡の帰属時期については、SI14竪穴住居跡が出土遺物の年代から8世紀前半～中頃と考えられる。また、SI1竪穴住居跡はSI14竪穴住居跡と方位が共通し、出土遺物の年代観に矛盾がないことから同時期と考えられる。これらは近隣の戸ノ内遺跡・六角遺跡・堀の内遺跡など（町1・6・8・19集）で確認している集落との関連が想定され、当時の集落が円田盆地北部の広範囲に展開していたことを示すと考えられる。なお、SI5・17竪穴住居跡については出土遺物がなく、遺構の特徴にも不明な点が多いため帰属時期を特定することは難しい。

土坑 8基（SK3・4・6・7・8・9・11・12）を確認した。調査区中央～西部の平坦面から東部の落ち際にかけて散在する。主に平面形と規模から長軸0.6～1.0mの円形基調ないしは楕円形を呈するもの（SK4・7・11・12）、長軸1.0m、短軸0.7m程度の隅丸方形を呈するもの（SK3）、長軸1.2m、短軸0.4m程度の溝状のもの（SK6）、径1.4m程度の円形基調のもの（SK8・9）がある。堆積土はSK6土坑で崩落土、SK8・9土坑の下層で人為的埋土を認める。

遺物はSK8土坑で陶器筒形碗、硬質粘板岩製硯、玉髓製火打石などが出土した。硯・火打石は上層で出土し、陶器碗は上層・下層で出土した破片が接合している。陶器筒形碗の年代は江戸時代末期～近代である。

これらの土坑の性格と帰属時期については、SK6土坑は形態的特徴から狩猟用の落とし穴の可能性がある。遺物は出土していない。SK8土坑は形態的特徴と出土遺物から土葬墓と考えられ、土層の堆積状況と遺物の出土状況から改葬が行なわれた可能性がある。帰属時期は出土遺物から江戸時代末期～近代と考えられる。また、SK9土坑はSK8土坑と形態的特徴と土層の堆積状況が類似



註2. 蔵王町六角遺跡SI210・753竪穴住居跡・SD206大溝跡出土土器（8世紀前半～中頃、町6集）、堀の内遺跡1996年度調査第11号住居跡（8世紀前半～中頃、町1集）など。

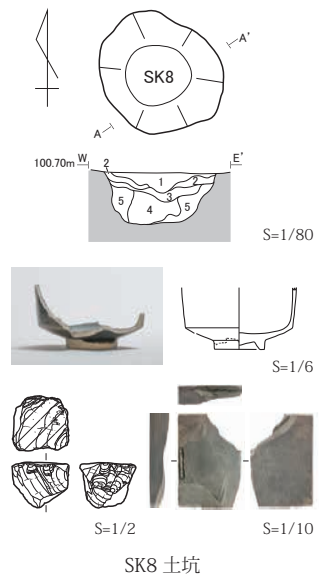
することから、同様の性格を持つ土坑と考えられる。

溝跡 4条 (SD10・13・15・16) を確認した。調査区西端の平坦面と東部の落ち際に掘られている。SD10 溝跡は上幅 1.15m で調査区東部の平坦面から落ち際へ向かって東西方向に直線的に伸びている。底面は西へ向かって傾斜する。SD13 溝跡は上幅 0.73m で調査区東部の平坦面と緩斜面を区画するように南北方向に直線的に伸びている。底面はほぼ平坦である。SD15・16 溝跡は調査区西端部の平坦面にあり、上幅 0.88～1.28m である。南北方向に直線的に伸びる SD16 溝跡から、SD15 溝跡が西側へ分岐して弧状に伸びる。底面は南へ向かって緩く傾斜する。

遺物は SD13 溝跡で寛永通宝が出土した。また、SD10 溝跡で土師器甕、須恵器甕などが出土したが、いずれも小片であり遺構の帰属時期を反映したものではないと考えられる。

これらの溝跡の性格や帰属時期については、SD13 溝跡の帰属時期が出土遺物から江戸時代末期以降と考えられるほかは、検討材料に乏しい。SD10・15・16 溝跡はやや規模が大きく形態的特徴に類似性が認められるが、詳細については今後の周辺の調査成果の蓄積を待って検討する必要がある。

柱穴 59 基を確認した。調査区中央部のほか、西端部と東部の落ち際にややまとまって分布する。建物跡などとして組み合うものは確認されず、出土遺物にも乏しいことから、性格や帰属時期は不明である。これらの多くは小規模で規格性に乏しい形態的特徴から、古代の律令期に伴う可能性は低く、中世以降の小規模な施設に伴うものと推察される。



第4章 総括

1. 西屋敷遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷ほか地内に所在し、円田盆地北部の低丘陵上に立地している。
2. 今回の発掘調査は県営ほ場整備事業に伴う集落道路2号線拡幅工事の事前調査として実施した。調査区は工事計画範囲のうち遺構の分布が確認された範囲であり、発掘調査面積は420㎡である。
3. 確認した遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑8基、溝跡4条、柱穴59基の計75か所である。
4. 出土した遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、弥生土器、陶磁器、石器、礫石器、石製品、古銭の計60点である。
5. 発掘調査成果を検討した結果、主に下記のことが明らかになった。
 - ・奈良時代前半（8世紀前半～中頃）の竪穴住居跡が確認され、当時の集落が営まれていたことが判明した。近隣の戸ノ内遺跡・六角遺跡・堀の内遺跡などで確認している集落との関連が想定され、当時の集落が円田盆地北部の広範囲に展開していたことを示す。
 - ・江戸時代末期～近代の土葬墓が確認され、当時の墓地が営まれていたことが判明した。
6. 今回報告した発掘調査成果は、円田盆地周辺に居住した当時の人々の具体的な暮らしぶりを知る上で貴重な手がかりとなるものである。

引用・参考文献

- 相原淳一 2016 「宮城県における薄手無文土器の再検討－宮城県蔵王町上原田遺跡・明神裏遺跡－」 東北歴史博物館 研究紀要 17 東北歴史博物館
- 伊東信雄 1955 「各地域の弥生式土器－東北－」 『日本考古学講座 4』 杉原莊介編 河出書房
- 大場正善 2004 「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について－東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髓原産地遺跡からの予察－」 宮城考古学 6 宮城県考古学会
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 「新版 標準土色帖（2005年版）」 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 日本色研事業株式会社
- 風間観静 1983 「仙台藩の街道」 『宮城の研究 5 近世編Ⅲ』 渡辺信夫編 清文堂
- 刈田郡教育会 1928 『刈田郡誌』 宮城県刈田郡教育会編
- 蔵王町史編纂委員会 1987 『蔵王町史 資料編Ⅰ』
- 蔵王町史編纂委員会 1989 『蔵王町史 資料編Ⅱ』
- 蔵王町史編纂委員会 1993 『蔵王町史 民俗生活編』
- 蔵王町史編纂委員会 1994 『蔵王町史 通史編』
- 佐々木繁喜 2009 「蔵王町から発見された黒曜石について」 地学部会誌 46 宮城県高等学校理科研究会
- 白石市教育委員会 1968 『白石市周辺の遺跡遺物目録』 白石市文化財調査報告書 7
- 白石市史編纂委員会 1976 『白石市史 別巻 考古資料篇』
- 白石市史編纂委員会 1979 『白石市史 I 通史篇』
- 杉原重夫・金成太郎・弦巻千晶・弦巻賢介・佐藤裕亮・金木利憲 2011 「宮城県刈田郡蔵王町内出土黒曜石製遺物の原産地推定」 『西浦 B 遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』 蔵王町文化財調査報告書 10 蔵王町教育委員会
- 鈴木雅 2016 「律令国家形成期の陸奥国柴田・刈田地方－蔵王町円田盆地の遺跡群の検討を中心に－」 宮城考古学 18 宮城県考古学会
- 鈴木雅・佐々木繁喜 2016 「縄文時代の蔵王東麓における黒曜石利用－谷地遺跡ほか出土黒曜石の原産地推定から－」 宮城考古学 18 宮城県考古学会
- 名取市教育委員会・宮城県病院局 2002 『野田山遺跡－宮城県立がんセンター緩和ケア病棟建設関係発掘調査報告書－』 名取市文化財調査報告書 47
- 林謙作 1962 「東北地方早期縄文文化の展望」 考古学研究 9-2 考古学研究会
- 伴雅雄・及川輝樹・山崎誠子 2015 『蔵王火山地質図』 火山地質図 18 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 宮城県教育委員会 1980 「持長地遺跡」 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』 宮城県文化財調査報告書 80
- 宮城県教育委員会 1984 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ（二屋敷遺跡）』 宮城県文化財調査報告書 99
- 宮城県教育委員会ほか 1987 『小梁川遺跡』 「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 宮城県文化財調査報告書 122
- 宮城県教育委員会 2003 「十郎田遺跡ほか」 『壇の越遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書 195
- 宮城県教育委員会 2010 『鍛冶沢遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書 222
- 矢部倉吉 1995 『改訂増補 古銭と紙幣』 金園社

蔵王町文化財調査報告書（蔵王町教育委員会発行）

- （1990）『堀ノ内遺跡』
- 第 1 集（1997）『堀の内遺跡』
- 第 2 集（2002）『諏訪館前遺跡』
- 第 3 集（2005）『都遺跡ほか（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）』
- 第 4 集（2006）『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
- 第 5 集（2007）『中沢 A 遺跡』
- 第 6 集（2008）『六角遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 8 集（2009）『戸ノ内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 9 集（2009）『青竹遺跡』
- 第 10 集（2011）『西浦 B 遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』
- 第 11 集（2011）『窪田遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 12 集（2011）『小原遺跡－特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査－』
- 第 13 集（2011）『十郎田遺跡 1－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 14 集（2011）『十郎田遺跡 2－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－
SE66 井戸跡出土木製遺物編 附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』
- 第 15 集（2012）『西屋敷遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 16 集（2013）『前戸内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 17 集（2014）『磯ヶ坂遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 第 18 集（2014）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 1（平成 18～24 年度）』
- 第 19 集（2014）『円田盆地の遺跡群 1
－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査＜総括編＞－』
- 第 20 集（2015）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2（平成 25 年度）』
- 第 21 集（2016）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 3（平成 26 年度）』
- 第 22 集（2017）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 4（平成 27 年度）』

報告書抄録

ふりがな	にしやしきいせき2							
書名	西屋敷遺跡2							
副書名	農地整備事業（円田2期地区）に伴う緊急発掘調査							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10 TEL 0224-33-2328 FAX 0224-33-3831							
発行年月日	西暦2018年（平成30年）1月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
にしやしき 西屋敷遺跡	蔵王町大字小 村崎字西屋敷 ほか地内	43010	05196	38° 07' 42"	140° 41' 17"	2016.10.24 ～ 2016.12.22	420㎡	農地整備事業 （円田2期地区） 集落道路2号線 拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
にしやしき 西屋敷遺跡	集落跡	奈良	竪穴住居跡2軒		土師器（坏・鉢・甕） 須恵器（坏）			
	墓地	近世～近代	土葬墓2基		陶器（筒形碗） 石製品（硯・火打石）			
	不明	不明	竪穴住居跡2軒 土坑6基 溝跡4条 柱穴59基		弥生土器 土師器（坏・甕） ロクロ土師器（坏） 須恵器（坏・甕） 陶器（碗・甕） 磁器（碗・猪口） 古銭（寛永通宝） 石器（石核・剥片） 礫石器（磨石）			
要約	奈良時代前半（8世紀前半～中頃）の竪穴住居跡2軒を確認し、当時の集落が営まれていたことが判明した。近隣の戸ノ内遺跡・六角遺跡・堀の内遺跡などで確認している集落との関連が想定され、当時の集落が円田盆地北部の広範囲に展開していたことを示す。また、江戸時代末期～近代の土葬墓が確認され、当時の墓地が営まれていたことが判明した。							

印刷製本仕様

製 本：A4 判（縦）、無線（あじろ）綴じ、並製本

ページ数：50ページ

印 刷：表 紙 オフセット印刷、表面 4 色刷り、210 線

裏面 1 色刷り、210 線

本文等 オフセット印刷、両面 4 色刷り、210 線

用 紙：表 紙 コート 180kg（PP 貼加工）

本文等 マットコート 90kg

原稿形式：Adobe® InDesign® CS5.5 (7.5.3) PDF/X-1a:2001

（OS：Microsoft® Windows® 7 Professional）

ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第 23 集

西屋敷遺跡 2

農地整備事業（円田 2 期地区）に伴う緊急発掘調査

2018 年（平成 30 年）1 月 20 日 印刷・発行

編集・発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10

T E L 0224-33-2328 F A X 0224-33-3831

印刷・製本 株式会社 津田印刷

